口語詩句投稿サイト72ｈ

口語詩句年鑑２０２５

ことばの力詩集別冊

口語詩句投稿サイト72h



口語詩句年鑑２０２５

ことばの力詩集別冊

目次

【第７回口語詩句賞】
実施概要・選考結果　6
受賞者作品・コメント　8
一次選考　集計表　32
一次選考　選評　34
二次選考　選考会記録　67

【２０２６年度口語詩句奨学金】

実施概要・選考結果　112
奨学生作品　114
選考総評　158

第7回口語詩句賞

実施概要・選考結果

受賞者

大　賞　常田瑛子

奨励賞　牛田悠貴、川上真央、田中まい、和田実希

選考方法

第7回口語詩句賞実施要領に基づき、『口語詩句投稿サイト72h』の投稿者に対して、次の方法で選考を行った。

一次選考

今回投稿期間中の投稿者のうち、投稿20作以上で選考対象となる者から、選考委員各自が大賞候補者1名（選評および参考作品20作）、奨励賞候補者2名（参考作品各10作）を選出した。

二次選考

一次選考の結果をもとに、選考委員全員参加の選考会における議論を経て、大賞候補者のうち1名を大賞、その他を奨励賞の授賞対象者とした。

＊投稿者総数　７５８名（１２４３４作品）
＊選考対象者数　２１０名（９１０８作品）

選考委員

暮田真名（川柳人）、小島なお（歌人）、杉本真維子（詩人）、高橋修宏（俳人・詩人）、立花開（歌人）、西躰かずよし（俳人）、林桂（俳人）、龍秀美（詩人）＊龍秀美氏は二次選考欠席

日程

投稿期間　２０２５年２月１日～２０２６年１月31日
選考期間　２０２６年２月２日～３月11日
選考結果開示日　２０２６年３月24日
授賞式　２０２６年３月30日

賞金

大賞　１００万円
奨励賞　各10万円

大賞

常田瑛子

本名　常田瑛子
１９８７年生まれ
山口県在住
学校司書
第52回全国短歌大会佳作（石川美南選）、令和５年度宇部市芸術祭　短歌部門宇部文化連盟賞、第６回口語詩句賞奨励賞、第27回ＮＨＫ全国短歌大会佳作（佐佐木頼綱・米川千嘉子選）

除け者にされた獣の毛が詰まり
鍵が奥まで入らない星　1

水を飲む牡鹿のように文字を産む
万年筆は秋の静謐　2

〈ほろほろ〉と
〈Ｈｏｌｄ　ｏｎ〉を聞き違え
テッポウユリは斬首の角度　3



十月の森に入ればわたしだけ
映っていない静かな鏡　4

傘立ては雨の靴下
居ない人の声を
思い出すころに履く　5

夏の屋上の正午は白蛇が
横切るような光の破裂　6

海を容易く脱ぎ捨てるトビウオの
胸びれは光で濡れている　7

空の箸箱をしずしず持ち運ぶ
花びらよりも薄いからだで　8

キリンでも飼うつもりなの三月を
こんな明るい吹き抜けにして　9

春風のアンダースロー受け止めて
生まれる前の草原にいる　10

（期間中投稿作品72作より自選）

受賞コメント

小学校で学校司書をしています。勤務先の学校図書館はキリンが飼えそうなくらいの吹き抜けがあり、いつも温かい笑い声が響いています。私はカウンターで、生きている言葉や活字になった言葉と接しています。子ども達は、小さな嵐です。どの嵐も妙に明るくて、私に心の在処を教えてくれます。

短歌を詠むとき、生まれる前の草原を想います。その草原にそっと近付くと、光が生まれます。その光を見つけてくださり、ありがとうございました。

奨励賞

牛田悠貴

本名　牛田悠貴
1998年生まれ
東京都在住
音楽療法士



俺らって良く言えば自転車二台　1

筋肉に間借りしてまで居たいのか　2

発句ステップ踏むマツオ　3

指紋増してきてこの家じゃ狭いよ　4

数え歌らしい男になってくれ　5

反骨法人　6

白い肌がまわりだす換気扇の音色　7
政治的中立ころりんと語る　8
良い質問ですね身体は無いけれど　9
弔砲を撃つよ寝耳は列になる　10

（期間中投稿作品72作より自選）

受賞コメント

学生時代には全く縁のなかった文芸の世界、それも川柳の世界に、自分がここまでハマってしまったことに驚

いています。

２０２５年度は、ちょっとくらい息苦しくなっちゃってもいいから、本気で川柳と向き合ってみようと思っていたので、その終わりに、このような賞をいただけたことが大変嬉しく、ありがたく、光栄です。これからも（これからはまた、私自身のペースも意識しながら）川柳との関係の仕方を更新し続けていきたいです。

奨励賞

川上真央

本名　川上真央
２００７年生まれ
東京都在住
早稲田大学文学部文学科在学
第７回超然文学賞 短歌部門
最優秀賞、第59回詩人会議
新人賞佳作、第11回詩歌トライアスロン 三詩型融合部門奨励賞、第54回全国短歌大会学生短歌賞、２０２６年度口語詩句奨学生

藤の色をすみれの色で喩えては
一人称がゆらいでばかり　1

すずらんのように
うなじを光らせて
眠るあなたがまぶしい始発　2

こすれてはふくらむ
春の便箋に
ことばは小川の加速度をもつ　3



緑陰にわたしあるいは火の余裔

4

星空のように瞳は
傷ついて
テディベアまだ
抱かれるかたち

5

冬の朝
あなたの母語の音階で
少しふくらむわたしの名前

6

やわらかい諦めがあり
飛行機は
ゆきを見つめて速度を落とす　7

物言わずカフェが翳れば
人びとは
水仙のごと起きあがりゆく　8

クッキーの角までふくれ花明かり　9

うたうとはうったえること
丹田に
ふるえつづける水鏡がある　10

（期間中投稿作品67作より自選）

受賞コメント

この度はこのような素晴らしい賞をいただき、大変光栄に思います。

口語詩句のサイトに投稿を始めてから、私の世界は大きく広がりました。みなさまの作品に日々刺激を受けながら、創作を通して遠くの誰かと繋がれるよろこびを噛みしめております。まだまだ至らないところばかりですが、日常に埋もれているささやかな感情を掬い上げる言

葉を紡いでいけるよう、この賞を励みにこれからも精進してまいります。

本当にありがとうございました。

奨励賞

石村まい

本名　田中まい
１９９９年生まれ
兵庫県在住
第２回カクヨム短歌・俳句コンテスト二十首連作部門大賞、第７回笹井宏之賞 山崎聡子賞、２０２５年毎日歌壇賞優秀賞（水原紫苑選）、第８回青嵐俳談大賞入賞（森川大和選）

貝のうちに真珠ふくらむ春の日の
どうしようもなくきいろい眠気　1

つまらない季節でしょうか
花風呂に
腕をわすれたまま歯を磨く　2

シャチハタで
ゆるしてくれる建物に
まじめな花を借りにゆくのよ　3



あなたから薬をもらう
白昼の
ヘリコプターがあんなに遠い　4

鳥のみる夢にかならず降っている
光の雨の名前を知らず　5

空耳のまま
暮らしてもいいですか
餃子の並ぶスターバックス　6

そのときは
くらげのことばでなぐさめて　7

洗われぬ鉢として立つ
ぎんいろの
大きな種をくれるんでしょう　8

傘のない来世ひろーい
きんぴかの
鰯の群れにさらわれにゆく　9

しずかに

夢の蛇口をこわしたら
少年たちの砲弾がくる　10

（期間中投稿作品72作より自選）

受賞コメント

　このたびは奨励賞をいただき、とても光栄に思います。日頃お世話になっている方々をはじめ、佐々木泰樹育英会および選考委員の方々に深く感謝申し上げます。

　創作から離れてしまった時期が二年ほどあり、そのときはもう何もつくれないと思っていました。しかしふたたび、言葉の世界に足を踏み入れ、それを心から楽しい

と感じられるようになりました。これからも、文芸がそばにあることを信じて、自分なりに進んでいきたいと思います。

奨励賞

塩本抄



本名　和田実希
１９８８年生まれ
石川県在住
公務員
第53回全国短歌大会 富田睦子選者賞、令和８年歌会始の儀入選、第37回歌壇賞予選通過

鮮やかに色は溢れて
あなたとの
ボルダリングの始まりは四時　1

グリッターまみれの指で
来月のないカレンダー
捲りましょうね　2

靴下の穴から指を入れてみる
旧い家族の感触になる　3

梨のみず持て余しつつ
ゆっくりと
星の発酵してゆく暮らし　4

砂浜をアイスそんなに頬張って
ああほらコーン砕けてしまう　5

かすがいにもうならなくて
いいからね
お魚焦がしちゃってごめんね　6

どの角度からも入ってくる雨が
遊んでほしいルルかもしれず　7

もういいかいの
どうにか届く高さから
次々紙ふうせん落ちてくる　8

横たわるあなたの夜の河を思う
目が明るいと言われてからは　9

あー、こおり。
目を閉じてみて
牛乳のちょいうすいとこって
いいよね。
ね。 10

（期間中投稿作品61作より自選）

受賞コメント

完全には分かり合えない世界で、どうしても足りない言葉で、世界や自分を伝えようとする子どもの姿を見てきました。口語詩句投稿サイトで投稿する度、彼らのように言葉を試行錯誤する喜びを味わっていたと思いま

す。そのなかで、選者の皆様や投稿者の皆様からはたくさんのことを学ばせていただきました。

これからも詩句と正面から向き合い、こつこつと精進していきます。財団の皆様、選者の皆様、また投稿者の皆様、ありがとうございました。

一次選考　集計表

筆名 選考委員		常田瑛子 （山口県／39歳）	塩本抄 （石川県／38歳）	牛田悠貴 （東京都／28歳）	石村まい （兵庫県／26歳）	川上真央 （東京都／18歳）
評価（大賞候補◎ 奨励賞候補○）	暮田真名			◎		
	小島なお				◎	
	杉本真維子	◎			○	
	高橋修宏	◎			○	
	立花 開		◎			
	西躰かずよし	◎				
	林 桂				○	◎
	龍 秀美	◎				
集計	大賞候補	4	1	1	1	1
	奨励賞候補	0	0	0	3	0

ムクロジ（群馬県／18歳）	檜野美果子（宮城県／37歳）	奥井健太（滋賀県／23歳）	髙田皓輔（千葉県／21歳）	大西美優（広島県／24歳）	互井宇宙論（埼玉県／19歳）	快名（千葉県／22歳）	鶯浦るか（富山県／64歳）	にわ（栃木県／29歳）	小川未夜子（石川県／30歳）
	○				○				
		○				○			
			○						
							○		
○								○	
				○					○
○									
○								○	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	1	1	1	1	1	1	1	2	1

一次選考　選評

暮田真名

大賞候補＝牛田悠貴

①お体はもう轟きますか
②指紋増してきてこの家じゃ狭いよ
③話せば長くなる胴体部

牛田悠貴の川柳を読むときに受ける印象は、ホラー映画、ゾンビ映画、スプラッタムービーを鑑賞するときに受ける印象に近い。ほんらい不可逆で、丁重に扱われるべきものである人体が、あたかもやり直しがきくかのように粗末に扱われているのだ。

①「お体」と気遣われる身体が、しかし「轟く」という音響のみの存在であること。②家族が増えて家が手狭

になる。人間を「指紋」で換算する奇妙さ。③「話せば長くなる」という定型句を「胴体部」につなげることで、ろくろ首のように伸びる胴体が現れる。

④ドラムセットのいちいんでしたか
⑤二人一組で事柄になりなさい
⑥おにぎり（筋金入り）
⑦視線連邦つくっちゃおっか
⑧俺らって良く言えば自転車二台

牛田作品の中で、人はモノのように、モノは人のように振る舞う。

④⑤⑧固有性を剥奪され、「ドラムセット」「事柄」「自転車」として扱われる人々。「二人一組で〜になりなさい」は教員からの呼びかけを思わせる。「良く言えば」は卑屈さの現れだろうか。

⑥⑦反対に、命を持たないモノたちは妙に生き生きとしている。「筋子」ではなく「筋金入り」のおにぎりは、おにぎりであることに誇りを抱いていそうだ。⑦「連邦」という国家制度が、ここでは人々の「視線」によって作られる。「線」は結ぶものだから、「連」にスムーズに接続される。

⑨墓の方からおことわりだよ
⑩良い質問ですね身体は無いけれど
⑪性根ポイしなさい
⑫半ドアですよ、その走馬灯。
⑬あてどなく転生したお

⑨⑩⑬死者ですら死に続けることを許されない。「良い質問ですね」は池上彰からの引用だろう。身体がなくとも、先生の話を聞いて質問しなければならないのだ。

⑪「性根が腐っている」という言い回しがあるが、腐っているならば捨てなければならない、という徹底した姿勢。

⑫車の「半ドア」は、非常時の事故防止のためにあるらしい。死ぬときにみる走馬灯にすら、安全装置がついている。

⑭飼い主をダビングしては配る犬

⑮働く方を改革してしまったわ

人はモノのように、モノは人のように、を突き詰めていくと起こることは、主客の転倒である。⑭「犬をダビングしては配る飼い主」であれば珍しくもなんともないが、反転するだけでこんなにも恐ろしい。⑮「はたらきかた」を「はたらくかた」と一文字変えるだけで、労働者への配慮である「働き方改革」が、さらに企業にい

いように変更されてしまう。

⑯一人息子を半ダース抱いておる
⑰光る源氏を浴槽へ流し込む
⑱父の背に組体操を縫いつける
⑲数え歌らしい男になってくれ
⑳筋肉に間借りしてまで居たいのか

ここまで確認してきた**牛田**作品の特徴は、「男性性」に対峙するとき、ひときわ効果を放つ。家父長制において女性を都合良く扱いながらも、社会のなかでは駒のように使い捨てにされる男性という存在の両義性に迫ろうとしているように思える。

牛田の使用する「定型句の引用」や「語順の入れ換え」といった手法は、川柳形式の中で蓄積されてきたものである。詩型が積み重ねてきた表現と、個人の問題意

識が合致するとき、作品は強い批評性を持つ。わたしが**牛田**を推薦する理由である。

小島なお

大賞候補＝石村まい

石村まいさんの作品でまず目を引くのは、対象のなかに心理を見いだす際の比喩の取り扱いの清新さと、その裏側の慎重さだと思う。

かるがると／運び込まれる月や椅子／そういう失いかたを／何度も

生返事にあふれる日々の／だし巻きの／余生のような黄色がきれい

一首目では、廃品回収トラックに荷物が積み込まれる場面を想像した。思い入れのあった身めぐりの人やもの。しかし使わなくなってしまえば、あっけなく廃品として軽々と運び去られる。「そういう失いかた」には、失った事実よりも、どのように自分がそれらを手放したかという過程に心が寄せられている。二首目、現役寿命が延びた現代では死語になりつつある「余生」の言葉。けれど、

つねにデバイスからもたらされる享楽に浸り相手への返事をおざなりにしている私たちの生身はどこか余生に接近している皮肉にも似た危うさがある。ゆるく、ほどけてゆく黄色がやさしく楽なほうへ甘やかに誘うよう。

生まれた日のあなたに／金糸をめぐらせて／世界はすこし霞むのでした
空耳のまま／暮らしてもいいですか／餃子の並ぶスターバックス
シャチハタで／ゆるしてくれる建物に／まじめな花を借りにゆくのよ

こうした作品には作者にとっての世界像の一端が表れていると感じる。「あなた」という特別なひとにまるで金糸を巻き付けるように装飾して祝福する。けれど、誰かを特別と思うほどに金糸のかがやきは眩み、その心の

狭窄によって正常な視界は霞んでしまう。洗練されたスターバックスの世界ではおそらく一度たりとも発せられないだろう「餃子」の語。世界の言葉や音は、私の耳を通過することで私の世界へ自動的に変換される。聞くはずのない「餃子」の語が本当は何だったのか、確かめられないままに私たちは個々の世界を信じて生きてゆくしかないのだろう。「シャチハタで／ゆるしてくれる」場面は、この世のあらゆるシーンに存在する。契約書面、賃貸規約、顛末書など。１００均でも売っている簡易なシャチハタひとつを私そのものとして携えて、建物を渡りあるく社会へのシニカルでありながら、子どものようなまなざしに共感した。

たよりなく伸びてゆく蔓／ふたりとも／手紙を書いたことがないから

手紙を書くという行為はもはや日常では珍しく、簡潔でスピーディーなツールに置き換わった。便箋の白紙に自分の心を言葉にして書き記す。その過程の困難さについて。書き言葉ではない、もっと軽くて、曖昧で、婉曲で、リアルタイムで相手と気分の感触を確かめ合うコミュニケーションは、すがる所を探して伸びる蔓のようなものだという。

また語彙と韻律のバリエーションについても注目した。「きんぴかの鰯の群れ」「定規のような先輩」など枠組みに囚われない語の選択と、初句切れ、二句切れ、三句切れ、区切れなし、句跨がりなど自在な韻律感も魅力。

杉本真維子

大賞候補＝常田瑛子

昨年に引き続き、**常田瑛子**さんの作品を一年間読み、表現の幅のひろがりをかんじた。どの作品も生死に触れる切っ先をもち、軽く流すようには読ませない。読ませないぞ、という気迫がある。その点は昨年から一貫している。

昨年少々懸念したのは、倫理と美のバランスにおいて、美のほうが若干勝って「見える」ことの危うさだった。しかし、そこがよい意味で均され、融合され、作品がより豊かなものになった。また、これだけまとまった数の作品を読むと、ああこれは表現のバリエーションの一つなのだ、という印象にもなってきた。かなり個人的な解釈かもしれないが、作者と読者の関係はプライベートなものだと思っているので、このような受け止め方もよいのではないかと思った。つまり、ひとりの読者として説得

されたということだ。

以下、印象的な作品についてコメントしておきたい。

文脈は線路を渡り花びらの／ような歯型がうっすら残る

「文脈」とは何かという難しい問題が俎上にあげられ、それに対し、詩歌でしか応答できないやり方で応答されている。

目薬の成分表をくださいな／〈ふりそびれた雨〉と書き足すの

「くださいな」というのんきな言いっぷりが面白い。前年にはない遊びの部分が微かに見られる。緊張とリラックスの糸を巧みに織り交ぜ、独自の世界を編んでいる。「〈ふりそびれた雨〉」が目薬にはいっている、とは、なんという鮮やかなイメージだろう。

前世から予約していた夕焼けを／美術室まで受け取りに行く

予約という言葉から、美容院…をなんとなく連想したら、「美術室」ときた。紋切り型のイメージをさりげなく裏切っているところがよい。

炭酸のように予感が吹きこぼれ／あさっての夕焼けを組み敷く

「組み敷く」という言葉選びの厳密さ、精確さがよい。信頼できる、と思える。

除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星

魅力ある、印象深い作品。言葉の凝集力と内容（「獣の毛が詰まり」等）が一致している。

水を飲む牡鹿のように文字を産む／万年筆は秋の静謐

こちらも言葉と内容が一致している。つまり、作品という調和化において卓抜している。

点滴が海に溢れて／一人乗り用の観覧車で眠ってる

たとえば、倫理より美のほうが若干勝っている、とかんじたのはこのような作品だ。ただ、完成度は高いと思うし、わるいというわけではない。

高橋修宏

大賞候補＝常田瑛子

今度の賞の選出は、月次における佳作数を踏まえながら、もう一度作品を読みなおすことからスタートしました。その結果、大賞に**常田瑛子**さん、奨励賞に**鶯浦るか**さん、**石村まい**さんを推すことにします。

常田さんの作品は、若干の例外はあるものの、そのほとんどが二行による表記。明らかに、短歌体の基本を踏まえたものと言えるでしょう。そのため、本サイトでは視覚的な派手さやキャッチーな印象はありませんが、言葉の意味や音、また質感を活かした修辞、そこから立ち上がる審美的とも言える「光」のイメージには目を見張るものがありました。

空だけが残されていて／抜け殻の割れ目は小さな光の滝

はつなつの光を畳むように折る／紙飛行機は鳥のレプ

リカ

　また、昨年の選考会でも議論となった社会性、批評性に関しても、自らの作において独自なかたちで昇華し、今年度の作品として提示していることにも注目しました。

「右へ倣え」の日々のなか／透明なコップは雨を溜めても裸

除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星

　いずれの作も批評的なモチーフが具体的に提示されながら、安直な答えを求めることなく、「裸」や「星」という単語が深読みを誘うような気配をはらみ佇立しています。

　一方、けっして多くはないものの、口語ならではの質感や文体を活かし、日常からの逸脱をはかるような軽や

かな作も見逃すことはできません。ふと、作者の中にある茶目っ気、あるいはチャーミングな強かさにふれるような作品と言ってもよいでしょう。

目薬の成分表をくださいな／〈ふりそびれた雨〉と書き足すの

キリンでも飼うつもりなの三月を／こんな明るい吹き抜けにして

加えて、**常田**さんにおける「わたし」という主体の在りかたについても若干触れておきたいと思います。

十月の森に入ればわたしだけ／映っていない静かな鏡

通過電車で眠る誰かのために／初夏、美しい駒になりたい

一作目は、やや類想性を感じさせるものの、作者の「わたし」の特徴が露呈しているような作品です。どこか儚

いもの、絶えず流動する中で、「わたし」という主体を捉えているのかもしれません。おそらく二作目の「美しい駒」への変身願望などを含め、**常田**さんは容易に和解しえない世界に対し、「わたし」という主体を開き、晒しながら、巧みな修辞を繰り出すことで詩作（歌作）しているのでしょう。そして何より、一冊の作品集（歌集）として読んでみたいと思わせる美質を内包させた作者です。

なお、**鷺浦**さんの定型自体を内破するような俳句体の作品〈んめ、んまと父はいってた梅と馬〉、また**石村**さんの豊かな幻想性を呼びこむ短歌体の作品〈月は檻／うまれなかったアルビノの／けものを一羽のこらず抱いて〉にも注目しました。

立花開

大賞候補＝塩本抄

流れが速く物に溢れた現代において、どのように詩のヴェールをかけるか。新しいものが次々に生まれては消えていく中で、奇を衒うではなく、丁寧にスケッチすることにまた戻りつつあるのではないか、と**塩本**の作品を読んで感じた。描く対象が他者と同じでも、**塩本**は鉛筆の色を変えることができる。作品は色とりどりな個性を光らせつつも丁寧な描写に徹しており、作品群として見たとき印象に残るものが多かった。一冊の歌集として読んでみたい作者と思い、大賞に推した。

①グリッターまみれの指で／来月のないカレンダー／捲りましょうね

②砂浜をアイスそんなに頬張って／ああほらコーン砕けてしまう

③あー、こおり。／目を閉じてみて／牛乳のちょいう

すいとこって／いいよね。／ね。

〝物〟に対する思い入れが強いタイプなのだろうか。しっかりとした手触りが一首ずつ伝わってくる。①「来月のないカレンダー」とは十二月のことだろう。グリッターとは瞼などに乗せるラメのようなメイク道具。どうせ捨てるから意味のない行為と汚れた指で構わず触れることに、生活で蓋をされた寂しさを感じる。②言われた対象は両手でコーンを持って食べているのだろう。下句すべてが台詞であり、海風に晒されながらアイスを食べる人（おそらく子供）、コーンが崩れないように声をかける主体、互いの一生懸命さが可愛らしい。③「こおり」へのよろこびが伝わる。ちょっとニッチな部分を共感しあう。

④もういいかいの／どうにか届く高さから／次々紙ふうせん落ちてくる

⑤かすがいにもうならなくて／いいからね／お魚焦がしちゃってごめんね

⑥どの角度からも入ってくる雨が／遊んでほしいルルかもしれず

④紙ふうせんを投げてくる〝何か〟の小ささ。「どうにか」に背伸びやジャンプをしてできる限り多くこちら側に投げ入れようとしてくる様子が伝わってくる。⑤私性の詩形である短歌だが、あまり感情を描かない作者。家庭がうまくいっていないようで、ふとしたときにやり切れなさが滲む。母になりたかったのに、なりきれなかった。魚を焦がしてしまうように。⑥佳作で評した作品。かつて飼っていたペットの「ルル」の魂を感じた。降り込んでくる雨や風、陽射しすべてにルルのかけらを感じるのだ。観念世界でも動作を段階的に入れるなど動きを出し、

うまく読者にパスを渡してくれる。

評は書ききれないが、他に印象に残った歌を挙げていく。

鮮やかに色は溢れて／あなたとの／ボルダリングの始まりは四時

靴下の穴から指を入れてみる／　旧い家族の感触になる

焼きたての／バターロールを素手でいくときは／温度を感じないのよ

どこまでも伸びるチーズに／うれしくて／目が覚めたなら無臭のピッツァ

奨励賞には、**桜庭紀子**、**ケムニマキコ**の二名も候補に入れていた。口語のみから選出するのは、定義を考え出すと決めきれない思いもあったが、完成度・定義ともに**塩本**を推したい気持ちは変わらなかった。

西躰かずよし

大賞候補＝常田瑛子

常田は、生の意味を喪失した現在に、ざらざらとした生をもういちどとりもどそうとする。だからだろうか。作品は飛躍したイメージとぎりぎりの比喩に満たされる。それがことばの密度の高さへとつながり、ときに息苦しさすら覚える。たとえば「大人しい少女に似合う簪は／鎧の隙間に刺さる毒矢」のように。

それでも書き手は、死と隣りあわせの、ありのままの生を描こうとする。「〈ほろほろ〉と／〈Ｈｏｌｄ　ｏｎ〉を聞き違え／テッポウユリは斬首の角度」や、「まなうらの夜が崩れて／事故現場に散らばる／ガラスのような雪」といった作品では、通常では意識することのない死のイメージが鮮やかに描かれる。そこに予定調和としての生はない。

履き潰すバレエシューズを／本物の光の繭として胸に

抱く
喪主になる訓練をしているような／夕暮れの校庭の
棒立ち

彼女はどこへ向かうのだろう。描かれる世界には、ただ来るべき死までの時間がある。履き潰すバレエシューズを胸に抱くという行為は、あたりまえのようにこわれていく生を慈しんでいるのだろうか。作品のなかの喪主になる訓練をしているような棒立ちは、自身の死についての予行練習のようにも見える。

空の箸箱をしずしず持ち運ぶ／花びらよりも薄いか
らだで
真っ白な平均台を踏み外し／少し遠くに七月が咲く

今日もまた、彼女は花びらよりも薄いからだで、空の箸箱を運ぶ。それは空箱であるほかない生を、美しいも

のと信じているからに他ならない。遠くの7月は、平均台を踏み外したのちに、はじめて咲く。おそらく**常田**は、神なき時代にあって、彼方の7月をめざす一頭の蝶なのだろう。

林桂

大賞候補＝川上真央

川上真央氏を推す。短歌体を中心とした表現者である。言葉の根に作者の実感を残しつつ、レトリックを深める書き方で、よい意味での「青春短歌」と言える。甘やかな匂いを残しつつ、それに流されない抑制が効いている。比喩表現が卓抜だからであろう。

「野苺のかたちの／えくぼ」、「胸をさまよう土星のひかり」「童謡めく懐古談」「たまごは水の声でやぶれる」「丹田に／ふるえつづける水鏡」「テディベアまだ／抱かれるかたち」「あなたに解けたままの靴紐」のように印象的な輝く言葉が作品にちりばめられる。作者の言葉の感性のよさが伝わる。

多くの作品世界は「あなた」や「君」の相聞の世界に閉じている。その世界で輝く関係、言葉を紡ぐ。時に自画像めく「少女」が現れる。また時にその世界を囲む「人々」

が現れる。背伸びしない小さな世界を描くからこそ、その世界の輝きを映すことができているとも言える。

初夏の陽はすこししめって／さよならのあった／別れのほうが少ない

「初夏の陽はすこししめって」に、感情、感傷を隠しながら、幾つかの別れの季節を総括する。別れの挨拶を交わしながら別れる方が別れ方としては希である。別れの挨拶をするべき人で挨拶ができなかったこともあっただろうが、殊更別れの言葉を交わす程でもない関係の人々の中で生きていることに思い至る。その方が茫々たる寂寥感をもたらす。広い世界のとば口に佇んでいるのだ。多くの別れを経験して、別れのすれっからしとなった私などには、失われた感性だと気づかされる。この作品が作者の中で優れたものかは問わないで、作者の作品世界

を支える感性として今は貴重だと指摘したい。若いときにしか書けない世界がある。大切に書き留めて欲しい。

龍 秀美

大賞候補＝常田瑛子

出し過ぎて机の上に散らかした／ティッシュはくたばった鳥の群れ

除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星

地球儀の破片を野良猫が踏んで／意味を犠牲にしただけの午後

常田瑛子さんの作品の特徴はその社会性にあると思われるが、肯定と否定が微妙に絡まり、行動を働きかける主体と、動かされる側とがいつの間にか入れ替わることによって奥行きを深くする。机の上に散乱した白いティッシュの有様は秩序を失った自然への批判と共に、それを招いた人類の一人である自分の在り方への考察でもある。ティッシュを出し過ぎたのは誰か。（自分で）くたばった鳥は自己責任なのか。

除け者にされた獣は人間の営みの結果だが、同じ獣の一員としての自分がいる。そして鍵を入れようとしているのは何物か。鍵によって開けるもの（可能性）があるのか。

（既に）バラバラになった地球の未来を踏んでいる野良猫は、何のためにそんなことをしているのか意味も分からない。取返しのつかない「午後」。おそらく現在の地球上の誰にも意味は分からないのだ。

その結果、どこにも行くところの無い人間は

ヒトという飛べない鳥を青空に／生き埋めにした名残が二月

空だけが残されていて／抜け殻の割れ目は小さな光の滝

さみしさと呼ばれるものの輪郭よ／空を鳥から奪う

のは雨

——ということになる。

一方、言葉が生き物であることをまざまざと教えてくれる美しい作品群がある。

文脈は線路を渡り花びらの／ような歯型がうっすら残る

空の箸箱をしずしず持ち運ぶ／花びらよりも薄いからだで

炭酸のように予感が吹きこぼれ／あさっての夕焼けを組み敷く

空っぽを振りほどいたら夕焼けの／栓を抜かれてかえりたくなる

水を飲む牡鹿のように文字を産む／万年筆は秋の静謐

花びら、歯型、箸箱、炭酸、夕焼け。どれも叙情的、

官能的な単語だが、取り合わせられた物や、動詞によって動かされて微妙にずれ込むことで新鮮な光景を創る。

また、小さな者、遥かな物への視線も独特だ。

喪主になる訓練をしているような／夕暮れの校庭の棒立ち

点滴が海に溢れて／一人乗り用の観覧車で眠ってる

仰向けで海の起源を想うとき／眼裏で揺れている吊り革

やがて運命的に「喪主」になる人間の姿が見えている。それは「一人乗り用の観覧車」に乗る「未来を見るもの」としての作者の姿でもある。ひるがえって億年の太古を想うときも、侵入者として眼前にある謎としての「吊り革」。それは永遠の謎であり文学の目まいでもあるだろう。

短歌体に類がない厳しい批評を存分に盛り込みなが

ら、同時に叙情がその表裏として支えになっている魅力的な世界は、口語詩句の一つの可能性を示しており、大賞に推したいと考えます。

二次選考　選考会記録

開催日　2026年2月28日
司会　公益財団法人佐々木泰樹育英会事務局
※龍　秀美氏は選考会欠席

司会　本日の趣旨といたしましては、一次選考で挙げられた大賞候補5名の中から、大賞1名を決定することが第一の目的となります。大賞に選ばれなかった4名は自動的に奨励賞となりますが、さらにこの人も奨励賞に加えるべきという方が奨励賞候補10名のうちにいれば、若干名追加するという流れになります。昨年と同様、本日の記録は文字にして公開させていただく予定です。公的な選考会ですので、編集は最小限にしてなるべくそのまま出したいと考えておりますので、ご発言についてもそれを前提にしていただければと思います。

まず、大賞候補として、**常田瑛子**さんに4票集まっておりますので、こちらを軸に進めたいと思います。**常田**さんを大賞候補に挙げられた4名にあらためてその評価をお話しいただき、続いて、それ以外の方々に**常田**さんの作品をどのように評価されるか、また、ご自身が大賞に推した作者についてどのように評価されるかを、順番にお話しいただければと思います。

杉本真維子（大賞候補＝常田瑛子）

司会　それでは、お名前の順で杉本先生から、大賞候補の**常田**さんについてお願いします。

杉本　私が**常田**さんを推した理由は、昨年に引き続き今年も作品を読み、その中で表現の幅の広がりを感じたからです。昨年からですが、どの作品にも、生と死に触れる切っ先のようなものがあって、「軽

くは読ませないぞ」という気迫があります。そこは一貫していると思います。

昨年、私が勝手ながら少し懸念していたのは、倫理と美のバランスにおいて、美の方が若干勝って見えることの危うさでした。しかし、今年の作品を読んで、いい意味でその辺りが均され、融合し、作品がより豊かなものになったと思いました。表現のバリエーションの一つなのだと、他にもこうしたいろいろな作品があるんだと感じて、選評にも書いたとおり、つまり、一人の読者として説得されたのだと思います。

常田さんの印象的な作品についてのコメントは、ここでは全部は読めないのですが、「**文脈は線路を渡り花びらの／ような歯型がうっすら残る**」では、〝文脈とは何か〟という大変難しい問題に対して、詩歌でしかできない方法で応答されている。また、昨年はなかったような「**目薬の成分表をくださいな／〈ふりそびれた雨〉と書き足すの**」という、少し呑気な味わいもあります。こうした作品はこれまでなかったような気がするので、魅力が増したということで選びました。

高橋修宏（大賞候補＝常田瑛子）

司会　続いて、高橋先生、同じく**常田**さんについてお願いします。

高橋　僕は昨年も気になっていたのですが、自分が読み切れなかったという部分もあり、最後まで奨励賞の候補にはしながらも選びませんでした。小島さんや杉本さんの話を聞いて、選考会を通して、お二人が言っていたことをあらためて確認するのですが、その後で**常田**さんを読むと、こんなにいろいろなバリエーションがあるんだな、と感じました。当初は、**さいう**さん（第6回口語詩句賞大賞受賞者）

との比較の中で、**さいう**さんがフェザー級だったら、**常田**さんはヘビー級というか、ちょっと重い感じの、たぶん、言葉に重力があるんですね。一方で、おちゃめな部分もあって、そういう書き方が気になってきて、年間を通して注意しながら見てきた部分があります。杉本さんがおっしゃったことも重なるのですが、**常田**さんの場合、重層的、多層的というんですか、一人の作家なんだけれども、〝何を切っても**常田**さん〟ではなく、多面的な要素が幾層にも重なっているところに魅力があると感じています。

もう一つは、作品を投稿する際の一つの作家的な姿勢ですね。その点については、選評にも書いているのですが、短歌と俳句とアフォリズム、川柳と俳句と詩のように、いろいろなものに手をつけている方が多い中で、**常田**さんは一貫して短歌を選択している。立花さんが、昨年の選評の中で、表現者と作家の違いについておっしゃっていて、この口語詩句賞は、単にいい作品を選んで賞をあげるためのものではないと思っています。これから作家になっていく人のためのプラットフォームのような役割があって、受賞をきっかけに作家としての自覚、プライドを育てていく、そういう意味を持つ賞ではないかと思うんです。そう考えると、**常田**さんの姿勢を見たときに、やっぱり全部短歌なんだ、と思いました。

それから、視覚的に派手ではないんですよね。みんな2行、せいぜい3行ぐらいで書いている。僕は昨年**さいう**さんを選んでいて、**さいう**さんの場合は、多行で書いているという違いですが、今、女性の歌人でいらっしゃいますよね、多行で書いている方が。『ｓａｉ』の短歌同人誌に所属されている方。

小島　今橋愛（１９７６―）さん。

高橋　そうそう。知人から『ｓａｉ』のバックナンバーを見せてもらったら、今橋愛さんは、多行という表現を自分のオリジナルにしていますよね。僕は、**さいう**さんはそれではないのではないかと思っています。決して**さいう**さんを貶めるわけではないですが、作家的な倫理のようなものを考えると、今橋さんのような方が一方でいらっしゃるので、僕の中では**さいう**さんの評価が曇った部分がありました。

それに対して**常田**さんは、そういうビジュアルで見せるのではなく、あくまでも自分は短歌を書き続けるんだ、という潔さが見えてきて、いいなと思ったんですね。昨年出てきた社会性や批評性という話に対しても、きちんと応答するような形で作品を磨き込んでいると感じました。

だから、僕が挙げている「**「右へ倣え」の日々のなか／透明なコップは雨を溜めても裸**」。これは一見少し読みにくいし読み取れないけれど、僕はこれを読んだときに、石原吉郎（１９１５―１９７７）の抑留された厳しい世界のようなものを一瞬感じました。あるいは一方で、「**除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星**」。これは今の地球の話と考えてもいいと思うのですが、たぶん、規律というものに対する身体的な強制ですよね。バイオポリティクスというか、生政治ですね。だからこの歌は、〝身体を強制する何か〟という、その何かは読み取れるけれど、簡単には読めないんです。こちらの批評に対する応答のようなものも、ちゃんとある方だなというところに好感を持ちました。

杉本さんがおっしゃった「**目薬の成分表をくださいな／〈ふりそびれた雨〉と書き足すの**」にしても、こういうちょっとおちゃめな部分がある一方で、「**キリンでも飼うつもりなの三月を／こんな明るい吹き抜けにして**」も、ポカーンとしているんだけれど、〝間抜けた〟というのではなく、チャー

ミングで、したたかな印象を受ける。その幅を考えると、僕は読んでいく中で、**常田**さんという作家の輪郭が見えてきたように感じて、この人は、一冊の歌集なり作品集として読みたいなと思ったんです。

この賞で選ぶというのは、最後はそういう作品集になったときに、今度はどう評価されるかという部分があって、たぶん、それにかなうだけの力量があり、一方で、その覚悟、さらにはそれに匹敵する誠実さもある。**常田**さんは、全体の作品を通して見てもいいなと思い、今回大賞に選びました。

西躰かずよし（大賞候補＝常田瑛子）

司会　続いて、西躰先生も**常田**さんについてお願いします。

西躰　読みやすいか読みにくいか、ということになると、決して読みやすくはないかなというところと、〝わたくし性〟のような、今の短歌とは少し違う感じもあるのですが、その生き死にというか、実存というか、そういうところに愚直に向き合い、その問いを直接作品に込めている。その思いがすごく伝わってくる作品だなというところがありました。

俳句で言うと、小宮山遠（１９３１―２０１７）みたいな。一歩間違えると観念的になってしまうところもあるのですが、そこが杉本先生の心配されているところと近いのかどうか、私にはわからないのですが、そういうところはありつつも、時々すごいなと思う。

例えば、「**喪主になる訓練をしているような／夕暮れの校庭の棒立ち**」。校庭で棒立ちになっていることを、「喪主になる訓練をしている」という、その捉え方にすごく惹かれました。具体的なものでいくと、「**真っ白な平均台を踏み外し／少し遠くに七月が咲く**」。「七月が咲く」というのも少

し抽象的ですが、僕のイメージでは、ある種の希望のようにも読めます。けれど、あえて「平均台を踏み外し」という、その痛みの向こうに、というような書きぶりに、すごく惹かれますね。先ほど話に出てきた「**キリンでも飼うつもりなの三月を／こんな明るい吹き抜けにして**」ですが、この「明るい吹き抜けにして」という表現も、明るいけれど単なる明るさではなく、その裏にある種の重さがあるというか。

この人の作品はどれも、表現に対する取り組みの姿勢が、大真面目というか、愚直なまでに表現と相対しているように感じられて、そこに非常に惹かれて私は推しました。

司会　本日、龍 秀美先生はご欠席ですが、龍先生も大賞候補に**常田**さんを選ばれています。

暮田真名（大賞候補＝牛田悠貴）

司会　それでは、暮田先生から**常田**さんの評価について、ご自身の大賞候補である**牛田悠貴**さんについてもお願いします。

暮田　**常田**さんの作品は私もいいなと思うものがあって、総評で評を書いたこともあるのですが、私が好きな作品でいうと、「**除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星**」や「**永遠を見守りたいと／星が托卵する場所は／スケートリンク**」です。今挙げた作品は、「除け者」と「獣の毛」で、〝のけ〟という音がリプレイされていて、言葉の上ではなく、音でつながっている。「星が托卵する場所は／スケートリンク」も、スケートリンクの中央がくぼんでいるという、でもその形状って、スケートリンクを滑っている人間目線ではあまり気がつかないことで、スケートリンクを上から巨視的に見

たときに、巣と同じような形をしていることがわかる。それにはすごく高い視点が必要で、それが「星が托卵する」という視点の高さと合っているんですよね。巣とスケートリンクの形状の類似、そういう感覚的な部分でつながっている歌がいいなと思いました。

一方で、すごく巧みな作者だと思うのですが、その巧みさが少し息苦しく感じられることもあります。「**〈ほろほろ〉と／〈Ｈｏｌｄ ｏｎ〉を聞き違え／テッポウユリは斬首の角度**」では、「Ｈｏｌｄ ｏｎ」は〝手を上げろ〟のような意味ですが、鉄砲も斬首も処刑をイメージさせるもので、意味でつながっているところ。それから、「**まなうらの夜が崩れて／事故現場に散らばる／ガラスのような雪**」。これは比喩なので、雪が散っているんですかね。事故現場で車などがめちゃくちゃになって、ガラスが散らばる。その透明なガラスが散るイメージと、透明な雪が散るイメージとが、一対一で対応していて、比喩から外に出られないように感じる。それが、言葉を支配的に扱っているように感じられます。「**目薬の成分表をくださいな／〈ふりそびれた雨〉と書き足すの**」の歌も、目薬と雨は水というところで似ていて、比喩がびしっと決まりすぎているときに、一読者として息苦しさを感じることがありました。

逆に「**キリンでも飼うつもりなの三月を／こんな明るい吹き抜けにして**」は、キリンがわりと唐突に出てきて、唐突なまま終わっている。でも「明るい吹き抜け」だから、キリンの首の長さと空の高さについて言っている。こういうびっくりするような言葉が使われて、そのまま回収されないままの歌の方が、個人的には好きでしたね。

私が推したのは**牛田悠貴**さんです。私は選考委員2年目で、前回初めて選考会に参加して、やっぱ

り自分のジャンル……私は川柳人なので、自分のジャンルには点が辛くなるなと思っていて。川柳の作品には不満が出やすいなと思うのですが、**牛田**さんは川柳でありながら驚かされるというか、川柳という表現を踏まえつつも、それを更新していこうという心意気が見られます。同じ川柳というジャンルですが、川柳だから推したということではなく、今の世界と切り結んで作品を書けていると思って選びました。

選評にも書いたのですが、本当に人が人として扱われないような作品で、読んでいるとびっくりしますが、「**父の背に組体操を縫いつける**」は、組体操自体が非人間的だと思うんですよね。人の上に人を乗っけちゃえ、みたいな。組体操って、日本では軍隊の〝戦争する体を作る〟ということと切り離せないものだと思っていて、〝父〟だし、しかも「背中で見せる」の〝背中〟だし、そういうマッチョな語彙を使いながら、おちょくりつつも告発している。男性性というか、男性は女性をないがしろに扱いながらも、一方で社会の中では使い捨ての駒として扱われているところがあると思うのですが、そういう男性の両義性のようなものが感じられて、**牛田**さんを推した次第です。

小島なお（大賞候補＝石村まい）

司会　続いて、小島先生、**常田**さんと大賞候補の**石村まい**さんについてお願いします。

小島　**常田瑛子**さんは昨年度、大賞に推していました。今年は4名の方が推されていて、基本的には賛同の気持ちでいます。**常田**さんは、常に一定の水準以上の作品を発表されているので、信頼を置いている作者の一人です。ただ今年は、彼女のいいところでもあるのですが、特徴である美的表現がやや複

雑になってきている印象がありました。

例えば、西躰先生が挙げていらっしゃる「**水を飲む牡鹿のように文字を産む／万年筆は秋の静謐**」では、まず「水を飲む牡鹿のように文字を産む」という比喩自体が非常に難解ですよね。飲むというのは、体の中に水を入れる行為ですが、それが、産むという体の外へ出す行為に託されている。どのように解釈するのが最善か迷いました。さらに、「万年筆は秋の静謐」もまた、心を留まらせるに十分な比喩です。一首の中の比喩の装飾度が、昨年よりも高くなっているような印象を受ける作品がいくつかありました。

ただ、私はもともと**常田**さんの喩えの技法が好きで、例えば、これも西躰先生が挙げられている歌ですが、「**空の箸箱をしずしず持ち運ぶ／花びらよりも薄いからだで**」。お弁当箱の中の空の箸箱と、「花びらよりも薄いからだ」を持つ自分の命とが照らし合わされていて、そういう空虚や洞のイメージを重ね合わせると、空の箸箱が小さな棺のようにも感じられてきます。季節がとても短い時間で移り変わっていく。そして自分の時間も、巨視的な目で見れば、とても短い時間で終わっていく。そのなかで、自分のいつかの棺をしずしずと持ち歩いているような感覚がある。皆さんが評価されているように、生と死を非常に詩的に、高いレベルで歌の中に取り込んでいると感じていて、今回も変わらずその作品世界に魅了されました。

今回私が推したのは**石村まい**さんです。私はまず、比喩の取り扱い方に注目しました。「**かるがると／運び込まれる月や椅子／そういう失いかたを／何度も**」の「そういうふうに失った」と言うのではなく、「そういう失いかたをした」。ここの言葉の取り扱いは非常に大事だと思います。私は、

廃品回収トラックに荷物が積み込まれる様子を想像しました。大事にしてきた身の回りのものが、何の思い入れもないいきさつや力によって運び去られてしまう。月と椅子が並列であるのも面白いところだと思うのですが、ただの取り合わせの面白さに終始していない。椅子は、自分の居場所を想像させる。自分が馴染んでいた場所が、なんてことなく失われてしまう。月も毎日そこにあるのに、必ず自分の意思とは関係なく沈んでいき、見えなくなってしまう。ある文脈に基づいて、こうした面白い取り合わせが選ばれているのかもしれないと思うと、比喩をとても慎重に取り扱っているという印象を持ちました。半分意図し、半分意図しない力で失ってしまった。そういうものたちに、私たちは囲まれているんだと気づかされます。

あともう一つは、「**空耳のまま／暮らしてもいいですか／餃子の並ぶスターバックス**」。ちょっとした面白さや遊び心にも幅のある作者だと思っています。美意識の高いコーヒーチェーンで、聞こえるはずのない餃子という言葉が聞こえた。でも、思えば私たちはみんな空耳で生きているというか、世の中に満ちている言葉や音は、全て自分の耳から脳を経由して変換されて入ってくるので、本当の音や言葉が聞こえている人は誰もいないんだと。みんなが世界を変換しながら、それぞれの世界に生きている。世界をどう捉えているかという、社会性につながる話かもしれませんが、こんなふうに不思議な変化球で歌える力量に注目しました。私が挙げた20首の中でも、初句切れ、二句切れ、三句切れ、句切れなし、句またがりがあります。語彙のバリエーションや韻律の操作にも、読ませる力があるように思います。

立花　開（大賞候補＝塩本抄）

司会　続いて、立花先生、**常田**さんについての評価と、ご自身の大賞候補である**塩本抄**さんについての評価をお願いします。

立花　**常田**さんはとにかく多作だなと思いながら、月次選考も行わせていただいていたのですが、先ほど暮田さんがおっしゃった「言葉を支配的にしている」という点には私も共感していて、因果関係を結ぶ言い切りが多い印象を持ちました。

昨日**常田**さんの作品を読み返していて、「**地球儀の破片を野良猫が踏んで／意味を犠牲にしただけの午後**」や「**嘴で火の心臓を捩じ切った／巨きな鳥が八月の使者**」には、これはこうなるんだよ、という、作者の中で決めきっている世界のようなものが、やはり強く出ています。**常田**さんの投稿した作品は全部で72作品だったと思うのですが、その中のほとんどを、そういった観念の世界のみで成立している作品が占めていた印象があったんです。後半20作品ぐらいは、畳み掛けるようにどんどん良くなっていって、この方向に進むのであれば大賞に、という思いはあったのですが、全体を通して見ると、比喩の畳み掛けを感じる作品がほとんどでした。美に対するバランスというのは、前回よりも少し危うくなっているという印象を、私も正直持っています。

美しい言葉を重ねれば重ねるほど、質感というのは失われていくような気がしたんですね。彼女の作品を見たときに、高橋先生のおっしゃったように、バリエーションが豊かであるという良い面もあると思うのですが、歌人として見ると、やはり、言い切りの因果関係の表現の多さは気になりました。観念の世界は、言葉でどこまでも広げていくことができる。言葉で、言葉で、とやっていけば美しい

世界ができるのですが、読者を置いていってしまうように感じる。美しいだけで終わってしまうところが、とてももったいなかったなと思いました。

でも後半、最後の方の作品だと本当にいいものが多いですね。「**作りかけのケーキのよう／妹は春の光に濡れて産まれた**」は、生と死の感覚と皆さんもおっしゃっていますが、「産まれた」というのは、妹はもう完成された形として生まれているのに、「作りかけのケーキ」という、未完成のものとして捉えている。ケーキにも生と死があるなら、作りかけはまだ生まれていない状態で、完成したら生まれたことになるはずなのに、〝作りかけのケーキのように産まれた〟。その矛盾を命の中で感じている。

それから、私も「**除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星**」の歌は佳作に選ばせていただきました。「「**右へ倣え」の日々のなか／透明なコップは雨を溜めても裸**」も、生、体の性、魂の性といったものを作品で扱うときに尖りがちになるのですが、すごく丸く収めているから、人の心に入りやすい感じがしますね。「**春風のアンダースロー受け止めて／生まれる前の草原にいる**」は、生まれながら、この世にいながらも、まだこの世にいない部分が人にはある、という感覚を彼女は持っているように思います。そして、その感覚を作品でどう表現していくかという方向に進んでいると感じました。

だから、多面的な部分を良しとするか否かというところで、私はその観念世界の方へ行ってほしくなかったので、大賞には選びませんでした。でも、作品は本当に素晴らしくて、歌集として読みたい作者の一人ですね。

では、**塩本**さんの作品に移りたいと思います。前回、口語詩句賞を決めるときに、〝口語詩句賞とは何か〟ということを、全員が初めて選考会で対面して話し合ったので、かなり白熱したと思うのですが、文語を使わないという特殊なコンセプトがあると思ったので、自分の中でもう一度、口語詩句賞について考えてみました。それで、現代は〝もの〟が本当にあふれていて、流行りのものがぽんと出ては廃れ、またぽんと出ては廃れていく中で、残していくためには何が必要なのか。それが、私は口語詩句の中で軸になっていくのかなと考えました。新しいものや唯一無二性を探っていくのもいいと思ったのですが、私は、目の前にあるものをどれだけ丁寧にスケッチできるかというところに、現代は戻っていくのかもしれないと思います。あまりにも流行り廃りがある中で、どれだけ目の前の〝もの〟を長時間見つめることができるか、見つめる心を持てるかというところが重要になると思いました。スケッチというと単調になるかもしれないと思いますが、**塩本**さんは、描いているものは同じでも、そのスケッチをする鉛筆の色を赤だったり緑だったり、黒以外にも変えられる力があるように思います。そういうカラーを自在に操れるところに新しさを感じて、描写に徹しているところに、今までの、描くとは何か、というものをきちんと継承している印象を受け、安定感があるなと思って選びました。全部で61作品ありましたが、いいなと思う作品の打率が本当に高くて。

「**グリッターまみれの指で／来月のないカレンダー／捲りましょうね**」、これは12月のことだと思うのですが、12月って、めくったらもう終わりなんですよね。次の新しい年のカレンダーを買わなければいけない。そうなんだけれども、そのカレンダーの周りをたくさん描いている。グリッターはラメなんですが、こすったりしても、ヘトヘトで「もうどうでもいいや、家だし」と、ぐちゃぐちゃっ

としたきれいではない手で、捨てるはずのカレンダーをめくっている。その動作や、カレンダーそのものの周りを細かく描いているところがいいなと思いました。

〝もの〟に対する思い入れが強いけれども、その〝もの〟に対する答えそのものではなく、外堀を埋めていくことで、作中のカレンダーが、今年最後のカレンダーなんだな、ということを浮き上がらせるのが、巧いんですよね。段階的に描いていて、表現のスモールステップが、読者へ作品世界をよく見えるようにしてくれている。**「もういいかいの／どうにか届く高さから／次々紙ふうせん落ちてくる」**、これはもう完全に観念世界なのかな。もしくは、子どもとかくれんぼをしているのだと思いますが、紙風船が実際に投げられていて、どういうシーンなのかはわからない。でも、この「どうにか届く高さ」というのが、一生懸命背伸びして投げて、こちらに落としてきてくれているんだろうという、その愛しさだったり、観念世界なのだけれども、動作を一段階、二段階と与えてくれるので、自分も目の前にいるような感覚になるんですよね。

それに関連していうと、**「どの角度からも入ってくる雨が／遊んでほしいルルかもしれず」**、これは、雨が、かつて飼っていた「ルル」というワンちゃんかと思ったのですが、これも自分の空想の世界と現実世界をつなげている。「どの角度からも入ってくる」という動作は、自分の体に雨が当たっている、でもそれが、かつて一緒に遊んでいたルルを思い出させる。その動作のリンクのさせ方が、温かくていいと思います。〝もの〟を上手に使って、自分の描きたいものを描き出す力が強いなと思いました。**「かすがいにもうならなくて／いいからね／お魚焦がしちゃってごめんね」**の歌も、おそらく家庭が少しうまくいっていなくて、「もうならなくていい」となると別れてしまう。そういった、ふ

としたところの自分の寂しさもちゃんと読み込む力があると思います。

一方で、「**焼きたての／バターロールを素手でいくときは／温度を感じないのよ**」や「**あー、こおり。／目を閉じてみて／牛乳のちょいうすいとこって／いいよね。／ね。**」のように、ユーモアにもちゃんと振れる幅の広さがある。同じ世界に立ちながら、どのくらい振り幅を持てるかというところが、私はこれからの時代で書いていくためには必要ではないかと思っています。

観念世界って必ず詰まるんですよ。歌人は必ずといっていいくらいその段階を通るのですが、でも、その観念性だけを一つの面として押し出してしまうと、表現は非常に難しくなります。作品を多面的なものにするためには、今ここにしっかりと足をつけて、自分が向かう先を選択できるか、その軸を自覚できているかが、キーポイントになるのだと思います。自分自身の生活感を全く出さない、「**鮮やかに色は溢れて／あなたとの／ボルダリングの始まりは四時**」なんて形の歌だったり、ユーモラスな「焼きたての／バターロール」や、「あー、こおり」みたいな歌もある。かと思えば、「かすがいにもうならなくていいからね」のように、自分の家庭はうまくいってないということを直接言わずに、その核の周りを肉付けして、読者に察する余白を与えている。

〝もの〟を上手に使う「グリッターまみれの指で」や、「砂浜をアイスそんなに頬張って」のように、多面性というのはいいと思いました。私の中で口語詩句の定義というものを考えたときに、それにもぴったり当てはまるし、完成度も高い、打率も高いというところで、**塩本**さんを推したいと思いました。

高橋　今、観念世界とおっしゃいましたが、**塩本**さんって、リアリズムというものをちゃんと通っている感じがするんですよ。〝もの〟を使っているということと同時に、「バターロール」にしても、「グリッター」

にしても、リアリズムを通った上で、そこに自分の思いや状況とのずれや、その様子を比喩的に挿入してくるという手法なのかと感じています。だから、**石村まい**さんや**常田瑛子**さんとは、明らかに違う短歌だと思っていて、非常に読みやすいのですが、短歌が専門ではない人間が読むと、俳句にはリアリズムの部分が結構あるので、〝もの〟の使い方に、少し疑問が出てくるんですよね。今、立花さんが観念的とおっしゃいましたが、僕は、今候補になっている中では、一番リアリズムに近いところにいるのだと思います。この人そのものがリアリズムというわけではないのですが、そう感じましたね。

立花　そうですね。私が観念的と言っていたのは、**常田**さんは観念的なものを多面的なものとして扱っていますが、**塩本**さんはそういったところがなく、リアリズムをベースに置きながら、自分自身の表現を発展させようと試みていると感じました。観念的というのは、**塩本**さんに関してはほとんど感じていないというところは、私も同じ意見です。

高橋　「遊んでほしいルルかもしれず」というのは、ルルがかつて飼っていた犬かもしれないという話を聞くと、泣きそうになりますね。完全にもう趣味の世界ですが、やっぱりこういうのは、犬猫好きには弱いですね。

立花　これを「どの角度からも入ってくる雨」とつなげている。だから、どこにいてもルルを感じている。結局はそこにたどり着くのかというのは書いていないですが、たどり着く場所がある。書かなくても、ちゃんとたどり着く場所があるんだよという、その余白で私たちを遊ばせてくれるのが、**塩本**さんの魅力だと思います。

高橋　僕、**塩本**さんの中でこれが一番かな。

立花　そうですね。人生の中で、これは、という作品を一つ作れたら、もうそれで十分ではないかと思うのですが、彼女のこれは代表作になると思いますね。なので、それに立ち会えたことも嬉しかったし、短歌をずっと書き続けてくださったというのも嬉しいです。

高橋　立花さんの解釈も見事なんですよね。だから打たれるというか。たぶん、僕はこれを佳作に挙げていないと思うんですよ。けれど、今の解釈を聞くと、いいなと思いますね。

立花　ありがとうございます。

林桂（大賞候補＝川上真央）

司会　最後に林先生、**常田**さんと、ご自身の大賞候補の**川上真央**さんについてお願いします。

林　まず**常田**さんですが、あらためて見ると、私は彼女の作品を随分選んでいるんですよね。自分でもびっくりするくらい選んでいるんです。例えば、「20作品選んでください」と言われたら、その20作品を超えるくらい選んでいて、そういう意味では、彼女の作品を評価しながら読んできたんですね。ところが、1作1作を、いいな、いいな、と思いながら選んでいましたが、逆に全部まとめて見ると、なんとなく一つの類型的なパターンが見えてきて、それで逆に、評価を下げてしまったんです。

まとまって見ていいなと思ったのは**川上**さんで、だから私は、**常田**さんと**川上**さんとの比較で、**川上**さんを残しました。私が読んだ印象では、**常田**さんはレトリックに優れたレトリシャンなんですよね。観念的なところもありますが、表現の完成度が高くて、その都度いいなと思いながら評価していたんです。それは、先ほどの高橋さんのお話にもあったように、「俳句を専門にしてる人の短歌読み」

のようなものがあって、塚本邦雄（1920―2005）が俳人たちにすごく人気があったのは、塚本邦雄の短歌が、どちらかというと俳句的なんですよね。すごく観念的かもしれないし、詰め込んでいるかもしれない。そういう意味では、塚本の短歌というのは俳句的で、私もそういう読み方で**常田**さんの作品を読んでいただろうと思うんです。

ところが、本当のレトリシャンだったら、こうは書かないのではないかということが気になって、それでやめたんです。つまり、2行目で非常にパターン化した表現がたくさん出てきているんです。「○○は○○」という形がたくさんあって、一首一首読んでいるときは、いいな、と思いながら読んでいたのですが、まとめて見ると、それがたくさんあるんですよ。私が、いいなと思って評価した中でも、「**翼なきものを手招く／秋の踊り場は光の梯子だらけで**」、「**水を飲む牡鹿のように文字を産む／万年筆は秋の静謐**」、「**湖をいちまいの氷で閉じて／冬は仏頂面の曽祖父**」などですね。こういうふうに、2行目でひっくり返すんです。比喩としては距離があって、すごくいいんですよね。それでずっと選び続けていたのですが、並べて見ると、一つの定型的な手法の中に収めてしまっているように思えてきました。

それで、短歌の文体としてどれだろうと見たときに、私は**川上**さんに共感できたので、**川上**さんを推すことにしました。〝完成以前の青春短歌〟という呼び方をしたのですが、まだ二十歳になっていないくらいで、作品を見ても、必ずしもいい作品ばかりではないんです。それこそ候補作品の中でも、書いているのは自分の中の小さな、狭い世界。社会に出る以前の、そういったロマンチシズムが入っているような世界ですが、ただ、作品世界としては伸びやかだし、それだけを見ると、ちゃんとでき

ている作品だと思えたんですね。リアリズムとまではいかないけれど、自分の生活とか自分の世界とか、背伸びしない自分の言葉の中で精一杯書こうとしている。私も年を取って健気な作品に涙もろくなっているのですが、そういった健気さのようなものに、足元をすくわれてしまったのかもしれないですね。

高橋　林　リリカルです。叙情ですよね。

そうです。だから、「**星空のように瞳は／傷ついて／テディベアまだ／抱かれるかたち**」なんて、テディベアをまだ手放せないような。「**夏霧にさらし／泣きあと糖衣めく**」もね。こういう「糖衣めく」というような、おじさんの弱いところが押されているのかもしれないですが。でも、そう感じながらも、こういうふうに書けたら、それはそれでいいのではないかなと思えたんです。一首一首見ると、やはりうまいんですよね。ちゃんと自分の世界と自分の言葉の中で閉じている、小さな世界ではあるけれど、高橋さんがおっしゃるように、叙情的な言葉の中でまとまっている。そういうところも決め手になりました。

石村まいの作品

司会　まだ少しお時間がございますので、今回、大賞・奨励賞合わせて4票を集めた**石村まい**さんについて簡単に評価をお話しいただければと思います。**石村**さんを選出された4名の先生方にお話しいただきたいのですが、小島先生、先ほどお話しいただいた内容に追加はございますか？

小島　私は大賞候補としてすでにお話しさせてもらったので、ほかの選者の方のご意見を伺いたいです。

司会　それでは、杉本先生、**石村まい**さんについてお願いします。

杉本　実は、**石村まい**さんと**常田瑛子**さんで最後まで悩みました。なぜかというと、**常田**さんが少しパターン化しているところがあるというのは気になるのですが、もしかしたら、長く読んでいるからそういうところが目につくのかもしれない。**石村**さんは読み始めて目が浅かったので、新鮮な感じがする。つまり、こちらの読んでいる長さの問題ではないかと思いまして、それで私は、**常田**さんを選びました。

石村さんは作品の書き方が全部違うというか、確かにパターン化していなくて、抜け感があって、読んでいて気持ちの良いところがありますよね。「**あこがれは／へびつかい座の手に落ちて／ときおり戦わせるカトラリー**」は、形から一つの姿のようなものが見えてくる、フォルムが見えてくるところがあって、私はいいなと思っていますね。ただ、また**常田**さんの話になってしまうのですが、比較したときに、先ほども申し上げたように、読んでいる長さの中で目についてきたパターンなのかと思うところがあります。だから、そのあたりを先ほどの話に付け加えさせていただくと、例えば**常田**さんの「**水を飲む牡鹿のように文字を産む／万年筆は秋の静謐**」。私は比喩としてとてもレベルが高いと思っています。「秋の静謐」に重心が置かれていて、それが重しになって揺るがないから、違和感が生じないのかもしれない。万年筆の持ち主である主体が、上から思考のようなものを飲んで、それが流れ落ちるように万年筆からインクが出て、静かにさらさらと流れて、文字が書き付けられていく。そういう隅々まで腑に落ちる感じがいいなと思いました。でも、ここに引っかかるという話も先ほどあったので、どうなんでしょう。詩人がみんな選んでいるので、詩人は**常田**さんが好きなんだと思います。

林　前回推した歌人たちが今回二人とも推していないですね。

杉本　それであらためて思うのですが、**常田**さんの作品を、私は詩として読んでいました。厳密にいえば、短詩型という大きなくくりで読んでいて、短歌と限定しては読んでいなかったかもしれません。

林　やはり自分の読み慣れた読み方で読みますよね。私もたくさん佳作に選んだのですが、それは塚本が書いた短歌文体の俳句のような読み方ができて、すごくいいんですよ。一首一首、ものすごくいいなと思いましたね。

高橋　文体だけでいうと、塚本さんの初期の文体に、「○○は○○」という断言が特に頻出しますよね。

林　ねじれ具合がものすごく気持ちいいんですよ。

杉本　そうそう、ねじれて。だから意味だけではなく、このフォルムというか、姿や歌の形というか、すべてにおいて受け皿が大きいんだと思います。それは力があるからですね。**石村**さんの作品には、気持ちよさや抜け感というものを感じていて、そちらにも私は惹かれています。

司会　高橋先生、**石村まい**さんについてはいかがでしょうか。

高橋　僕は、**石村**さんは大賞というよりも、自分が選んだ佳作の中からくっきりと浮上してきたように感じています。たぶん、**常田**さんは批評性のようなものも含めて、ある種の力強い文体を獲得していると思っているのですが、**石村**さんには、死の幻想というか、死への甘美な傾斜のようなものを感じています。それは魅力的ですが、大賞ではないと思っていて、けれど、やはり一首一首見ると、「**ことごとく雲逃げてゆき／晴天は／文字を抜かれた遺書に似ていた**」なんて、これは書けないなと思いますね。普通は、プラスしたもの、何かを加えたものが際立ってくるわけですが、抜かれたものが今度は遺書になる。晴天は遺書に似ているという発想は、僕はすごいなと思いました。

あるいは「**月は檻／うまれなかったアルビノの／けものを一羽のこらず抱いて**」というのは、このアルビノの出し方ですよね。ある種の奇形であり、ある種の不遇な存在に対する、熱い思いのようなものがあって、それはたぶん母性とは違うはずですよね。母性も含むんですけれども。こういう作品は、読んでいてどうしても打たれますね。あとは「**鱗粉をくぐった指はもどらない／わたしの夢へ泣きにくる人**」。

常田さんの場合は、個というものの中で、ある種の視線というものを手放しながら書いているのに対して、**石村**さんには、視線というものが書いていく中で変容していくように感じていて、そこに魅力があるんです。けれど、もしかしたらこれは短歌というものの持っている罠かなと思って、俳人はちょっと躊躇しました。

司会　林先生、**石村**さんについていかがでしょうか。

林　やはり先ほどの線の延長線上でいうと、もう少し作者の言葉が地に足がついていて、高橋さんが視線の変容と言いましたが、どこか作者像のようなものと結びつくような、そういう柔らかい言葉で書かれていますよね。そういう意味では、**川上**さんを大賞に推したのですが、**川上**さんが二十歳を過ぎて成人したら、こういう世界を書くのかなって、そういう世界にも見える。

「**はずせない画鋲ばかりに／照らされて／教室はときに夢の監獄**」は、急に小学生ぐらいの記憶が蘇ってくるんですよね。教室にいろいろなものを掲示するときに、思いきり画鋲を刺しますよね。それで、掲示物は取るけれど、画鋲だけはそのまま残って錆びついていくような、そういう経験を思い出します。必ずしも教室にいるということが幸せでない、そういう経験と重なっていく。この「外

せない画鋲」でこういうことを言うのかと、「画鋲」にすっかりやられました。

高橋　これも批評性ですよね。でも、「夢の監獄」だから、彼女がそこから出て、振り返って気が付くのでしょうね。

林　「**あたらしいことは／いつでもこわいから／これも／くさかんむりのかみなり**」の最後の、「くさかんむりのかみなり」というのは、「蕾」は「草かんむり」に「雷」と書くんだから。そこに、こういった「あたらしいことは／いつでもこわいから」みたいなものを見つけていく感性は、すごいなと思いながら読ませていただきました。先ほどの「**鱗粉をくぐった指はもどらない／わたしの夢へ泣きにくる人**」や、「**ひとりでは取りにいけない／鍵のこと／夜明けの桃の傷の甘さに**」。これは少し甘いですかね。でも、なんかちょっとやられてしまうんですよね。

高橋　全体に他界とか、場合によっては死者とか、そういう匂いがあるんですよね。たぶん彼女が読む場合の他者というものは、今生きている存在ではなく、亡くなってしまったもの、失ってしまったものに対するまなざしというか、応答のようなものを感じますね。

林　傷つきながら生きていくというか。でも、私たちもみんな大体そういう存在なので、彼女はそういうものをちゃんと受け止めながら作品にしている。だから最後、受賞者を選ぼうとしたときに、**常田**さんはこういう作品を書くのも非常にいいのですが、本当にこの作品を書かなければいけなかったのだろうか、この作品を書かなくても、彼女自身には大きな影響はないのではないかと。そうすると、**川上**さんや**石村**さんは、こういう作品を書かないといられないのではないかと思ってしまうような、「言葉が支えになっているんだよね」という、過剰な共感をしてしまうんです。

司会　今回**石村**さんを選出されなかった先生方についても、**石村**さんについてどう思われるか、お聞きしたいと思います。暮田先生からお願いします。

暮田　**石村**さんについては話したいことがたくさんあります。好きなんですよね。それで、小島さんが選ばれていた「**かるがると／運び込まれる月や椅子／そういう失いかたを／何度も**」ですが、私と小島さんでは読みが違うところがありますね。〝運び出される〟のではなく、〝運び込まれるもの〟で、私は、自分が気に入っている空っぽの部屋のようなものがあって、そこに明るくしようと月を持ってきたり、座れるように椅子を持ってきたり、それ自体はいいこと、月や椅子が増えるのはいいことなのかもしれない。けれど、自分が気に入っていた、自分が愛着を覚えていた空っぽの部屋はなくなってしまった、みたいな。〝ものが増えている〟ように、私は2行目を読み取っています。でも、そこで喪失を覚えている、そのアンビバレントさが、この歌の主眼なのかと思って読んでいました。

私は**石村**さんと**常田**さんは、作者としての性質も明らかに違うと思っていて、**常田**さんの作品は、すごく度の強いメガネをかけているような感じで、それに対して**石村**さんは、メガネを外して裸眼になろうとしているように感じるんですね。**常田**さんのところで頻繁に出てくる比喩ですが、見立てというものの危うさがあると思っていて。世界から自分が見たいものだけを見ているのではないかという、そういうところに少し信頼できなさを感じたんですね。西躰さんが選ばれていた「**フラスコにふつと彼岸花を挿せば／理科室に咲く赤い幽霊**」は、明らかに、彼岸花イコール赤い幽霊で一対一に対応していて、ある意味オチがついてしまうというか、種明かしをされて、そこで世界が閉じてしまうと感じています。

一方で、**石村**さんは、小島さんが選評で書かれていた「空耳」や「余生」に見られる、そのぼんやりとしたところは、他者に出会おうとしているのかなと思っています。「餃子の並ぶスターバックス」も面白いけれど、そうやって、自分の世界にないものが、うっかり見間違いのような形でも自分の世界に入ってくるということがあるのかなと思って。

それでいうと、「晴天が文字を抜かれた遺書」や「画鋲が夢の監獄」というのは見立てなので、そこは**常田**さんと似たような性質があると思うのですが、私は**石村**さんの見立ての歌よりも、もっとこう、ぼんやりしたところが、本当のことに迫ろうとしているのかなと思っています。私は作者としては、**常田**さんより**石村**さんを推したい気持ちがあります。**石村**さんとは年齢が近いのですが、ぼんやりしていて不確かな方が真実に近いという感覚に共感していまして、その世代感的な共感が、あまり世代論に価値を置きたくはないのですが、やはり**石村**さんの方が信頼に値するかなと思いました。

高橋　今おっしゃったのは、あえて解像度を高くしないということですか？

暮田　ものごとをぼんやり見る。けれど、「**あたらしいことは／いつでもこわいから／これも／くさかんむりのかみなり**」は、ある意味、ものをよく見すぎていて、「蕾」が「草かんむりの雷」になってしまったんですよね。それこそ、「度を合わせる」という意味では、蕾で焦点を合わせるのが正解ですが、もっとぼんやりというか、過剰な見方をした結果、蕾が「草かんむりの雷」という謎のものに変身してしまうみたいな。そんな謎の「草かんむりの雷」は、自分にとっては意味不明で都合が悪いものですが、その都合の悪さを歌に呼び込める、他者に開かれたものがあるのだと思います。

高橋　〝ぼんやり〟というのは、世界に対する拒絶の振る舞いではなくて、ぼんやりすることによって自分

を開くということですか？

暮田　そうですね、拒絶は感じないですね。むしろ、そのメガネのようなものを取り払って、本当に自分が見ているものを見るんだ、それをそのまま書くんだ、みたいな。

高橋　**常田**さんは、解像度を高くしようとしているよね。

暮田　「分厚いレンズを通してよく見よう」のような。でも、度の強いメガネって、像が歪んでしまうこともあるので、「歪めていないかな？」とは思います。それこそ本当に唯美的な世界なのかと思いました。やはり唯美的な世界は、倫理と相性が悪いんじゃないかなと思います。

高橋　唯美的というと、**石村まい**さんにもそれを感じましたね。

暮田　あまり私はそうは思いませんでした。〝死〟に対して、**石村**さんの中では、**常田**さんらしい作品、「晴天は遺書」や「夢の監獄」のような、そういう面もあると思うのですが。

高橋　**常田**さんの中には、あまり〝死〟というものに対するものはないでしょう。

暮田　「斬首」とか。

高橋　なるほど。そういったものが出るときも、おそらく**常田**さんの場合は、自己愛的な方向へ行くのではなく、〝死〟というものをある批評的なところに乗せるための手段になるのではないでしょうか。**石村**さんは、どちらかといえば自己愛ではないですが、自己も含めた〝死〟のイメージというものがあって、その部分に対する魅力というか、耽美的な魅力は感じるんです。僕はそれに対して少し踏みとどまった部分がありますね。

司会　立花先生、**石村まい**さんについてはいかがでしょうか。

立花　**石村**さんは、私も奨励賞にするかどうか最後まで悩みました。ただ、皆さんのようにそこまで深く読み込めていなかったというのを、お話を聞いていて思いました。どうしても短歌として出てくると、自分の専門ということもあって、点が辛くなるというのもあるなという自覚はあるんです。

未確定なものを細かく語ることで立ちのぼらせている美しさに、ある種の定型的なねらいのようなものを感じてしまったのが、どうしても気になりました。たぶん自分自身が今回、口語詩句賞の定義を「目の前のものにどのように接するか」というところに置いているので、その点がより気になったのだと思います。短歌作品として見るのであれば、今は作者自身が未確定なものへの儚さや美しさ、曖昧なものを曖昧なまま感じ取るという方向で作っていきたいんだろうな、とは思いました。でも、彼女のふんわりとした、鉛筆で描いたような世界、半分眠りながら見ているような世界というのかな、そういうのは魅力に感じました。

口語詩句賞というものが、私の中では今回すごく難しく感じました。なぜ文語ではだめなんだろうとか、そこは一つのコンセプトとして、それを追い求めていくというのも面白いと思うんですよ。これだけ口語作品が集まって、こんなにも多彩で色鮮やかな作品を見られるのは、なかなかない環境なので、縛りがある中でどれだけ自分を出すか、というところもあるのかと思いました。

一方で、先ほど言ったような「未確定のものを細かく語って」ということも、やはり短歌では、先ほどの観念世界と同じで通っていくところだと思っています。「ぼんやりと答えのないものに声は宿る」というのは、私もすごく共感するので、言い切ってはいない、その微妙なバランスを、糸を縒るように作っていくんだろうと思うんです。でも、まだ少し毛羽立っているというか、まとまっていない、きれ

いだけれどとどまっていないように感じるので、もう少し見守りたいですね。この人は、今はぼんやりとしていることを大切にしていますが、もう少し年齢を重ね、その先でクリアに見ざるを得なくなった世界に立ったときに、どのように書くかを見たいです。

前回もそうでしたが、私は表現者と作家の危うさというものが気になっています。表現者の段階で選ぶことは可能なんですよ。たくさん書いたり見たりしてきた我々の心に刺さるのは、表現者の、生の、まだ何の傷もついてない、ぷるぷるの状態のものが刺さる。けれど、私たちがそれを選んでしまうことによって、作家になれない人がいるかもしれないということが、私は危ういと思っています。なので、作家であるという信頼感がある人を、責任を持って選びたいと思う。でも**石村**さんは、まだわからなかったんです。ずっとこのふわふわっとした柔らかいままで、答えのないものの中に宿る声というものを探っていきたい人なのか、発展途上なのかというのがどうしてもわからず、選べませんでした。ただ、作品はとても好きなんですよね。読んでいると、慈愛の心のような、背中を撫でてもらっているかのような安心感があるので、**石村まい**さんについては、今は見守りたいと思っています。

司会　最後に、西躰先生、**石村まい**さんについてはいかがですか。

西躰　実を言うと、私は**常田**さんよりも**石村**さんの作品をはるかに選んでいるんですね。ただ、全体として見たときに、林先生とは逆のことを言いますが、林先生が選んでいる「**はずせない画鋲ばかりに／照らされて／教室はときに夢の監獄**」のような作品がぽろぽろ出てくると、逆に「ちょっとな」と感じてしまいました。この方の良さは、小島先生が選ばれているような「**生返事にあふれる日々の／だし巻きの／余生のような黄色がきれい**」や「**白ぶどうの部屋が一室あいている／岬のよう**

に夜をねむれば」、「どこまでも定規のような先輩を／しずかに照らす夜の自販機」だとか、このあたりが秀逸だと思いました。それで、小島先生が選ばれているような水準で全部書かれていたらいいのですが、時々とんでもなく甘い歌が入ってきて、「ん？」となってしまったんですよね。

だから、「すごく上手いのに、なんでほかもこの水準で書かないんだろう？」という思いがあったりして。ただ、この人の作品世界というのは、日々の中のちょっとしたところにある、ふわっとしたぬくもりのようなものを書くのがすごく上手いと思います。その目の付け所や比喩がはまったときには、絶品だと僕は感じますね。この人には書き続けてほしいし、年齢を考えても、今後が期待できると思っている人です。

司会　それでは一旦休憩にしたいと思います。この後、後半で大賞1名、奨励賞若干名を選出する議論を進めていきたいと思います。

休憩

常田瑛子の作品

司会　前半の議論を踏まえまして、大賞1名と奨励賞若干名を決めていきたいと思います。やはり一次選考で4票入っている**常田**さんが、大賞の中心になるかと思うのですが、今の時点で皆さん、大賞は最初に挙げられた作者と変わりないですよね。はい、わかりました。

それでは、前回に引き続き、多数決で決定することになるかと思いますが、お話を進めるにあたり、まずは**常田**さんを大賞候補に選んでいない方のご意見を伺いたいと思います。お名前順で、何かあれ

ばお願いしたいのですが、暮田先生、いかがでしょうか。

暮田　個人的には**石村**さんの方がいいと思いますが、最初に4票入っているので、**常田**さんが大賞になるのは自然なことだと思います。

司会　小島先生はいかがでしょう。

小島　今年度の作品に関して言えば、私は**石村**さんを選びましたが、前年度は、私は**常田**さんを大賞に推していましたし、**常田**さんは比喩や言葉の斡旋において圧倒的な力量を持っている作者だと思います。前年度の我々の議論も、熱心な方だからおそらく読んでくださっていて、ご自身のウィークポイントや特徴のどちらも理解しながら、長く作っていかれる作者だと思っています。これからの比喩との付き合い方も、さらに模索されて、来年度もいい作品が見られると思うので、4票入れた選者の方々に賛成します。

高橋　昨年より作品として少し落ちたと感じるんですか？

小島　落ちたというより、比喩の取り扱い方がより複雑になったと感じます。

高橋　僕はそこを評価したところもありますね。その修辞というか、それの巧みさというか、すごく複層的に作っているというところを評価していました。

林　全体的に**常田**さんだけでなく、投稿作品がみんな、比喩や表現力、そういう点でレベルアップしているというか、攻めてきていますよね。暮田さんは息苦しいとも言っていましたが、そういう意味では、**常田**さんだけでなく、全体的に表現力を磨いた作品が増えてきている。逆に私は、そういう作品ばかりで方向性がそちらへ行ってしまうと、選ぶ我々もきつくなるし、投稿する人たちもきつくなるかも

しれないと思うので、もう少し抜け感が欲しいというか、違った視点で選べるなら選んでおこうかと思いましたね。

高橋　林さんが前に言っていた「○○は○○」という表現が頻出するという話がありましたが、それが一番頻出するのはやはり塚本邦雄ですよね。だから、いろんなものを摂取しているという感じがあって。美意識ではない、それこそ批評性のようなものだったりね。その文体のようなものも多様になってきたかなと感じたのですが、先ほどの小島さんの「少し複雑になりすぎている」という話を聞いて、なるほどなと。

小島　先ほど、自分ではなかなか理解が追いつかなかった「**水を飲む牡鹿のように文字を産む／万年筆は秋の静謐**」について、杉本先生の解釈をお聞きして、少し腑に落ちました。もう一つ、杉本先生にお聞きしたかったのが、先ほど少し触れられていた、「**文脈は線路を渡り花びらの／ような歯型がうっすら残る**」の選評で、「詩歌でしか応答できないやり方で応答されている」という言葉が印象に残っています。この作品をどう鑑賞されたのか、もう少しお聞きしてみたいと思っていて。難しいけれど惹かれた作品だったので、その解釈を伺ってもいいですか？

杉本　今まで何度も〝文脈とは何か〟を考えたり、「文脈って何ですか？」と編集者に聞かれたりしてきたのですが、お互いに何も言えなくて、「文脈って難しいですね」で終わってしまうくらいの難題ですね。論理的に説明しようとすればできるのかもしれませんが、そうではなく、論理を超越したような言葉でしか、どうやっても言い当てられないものがあると思うんです。例えばここでの「線路」ですね。葉っぱの筋や葉脈などが何かと重ねられて文脈となる、というのはよく見るのですが、ここでは線路とい

う言葉が出てきている。何らかの形として出しているんだろうと思うんです。そして歯型もまた一つの形ですよね。その言葉が表す姿や形を重ね合わせたり、ずれを提示したりしながら、文脈とは何かを表そうとしている、示唆しようとしている、というふうに読めるんです。

小島 ありがとうございます。

林 **「文脈は線路を渡り花びらの／ような歯型がうっすら残る」**、これは二句切れですよね。「文脈は線路を渡り」で切れている。つまり、「文脈は線路を渡り」を受けて、「花びらのような歯型がうっすら残る」んですよね。だからそういう意味では、一方で文脈は、何の文脈かはわからないけれど、線路を渡っていく。そして、自分の方には何が残ったのか、うっすらとした花びらの歯型が残っている。それこそ、対比で書いていますよね。

小島 作品全体が、自分自身の比喩だと受け取っていたのですが。

林 そうです、そうです。

暮田 すごい野暮ですが、歯型が残るということは、誰かが何かを噛んでいますよね。

立花 表現するということは、傷つかずにはいられない、みたいな。だから、それでも表現したいという心は美しいものだから、「花びら」なんですよね。

杉本 私は、だから、おそらくほんの少しですが、轢死体。轢かれた体などにも関わるのかもしれないと少し思いました。

小島 難しいですよね、イメージの連環のような感じで。

高橋 轢死体というのは。

杉本　少しだけ、もうそこはその何らかの処置をした後で。

高橋　痕跡だけですね。

杉本　痕跡だけで、そこの痕跡がうっすらと。

立花　「線路」がわからなくさせているのではないのかなと思って。最近、あまり言葉や書くことに近くなかったのですが、そうすると、言葉を表現するための回路が閉じられる感覚があるんです。常に通り続けなければならない、書き続けなければならない。でも、それを渡すための言葉が自分の中や、自分の向こう側から出てきて、表現をする、この世に出すという回路があるんだと思うんですよ。そこに、常に文脈が渡るための道がある。そこを「線路」と書いてるのかなと感じました。

暮田　踏切が開いてるときにこう渡るのか、線路の上を歩いているのか。

立花　線路だから、もうその道は決まっていて、そこをこう文脈が電車のように何度も何度も。

高橋　電車は文脈ではないのでは？　この場合は、線路を渡るのが文脈。

立花　そうなんですか。私、線路がこうあって、電車のように文脈が常にそこを通っている、ここが私の言葉の開通の道だという感じなのかと。

高橋　文脈がこう、個の文脈というか、作者の文脈であるならば、線路はいわば制度のことでしょう。文脈自体が線路を渡るというふうに解釈した方がいいのではないでしょうか。線路はあらかじめ敷設されたものだから、あらかじめあるもの。それはある面では制度といってもいいですよね。そして、それを渡るのが文脈というね。文脈というのは個々によって違うわけなので。

　線路は何の比喩なの？って。そのものではなくて、文脈に横切れるものですよね。

林

高橋　線路というのは、深読みしすぎるかもしれないけど、たぶん言葉の中の制度性、その言語的な制度性のようなものを言っていると考えたらどうですかね。

立花　そうだと思います。

高橋　だから文脈というのは、個々の、10人いたら10人の作者の文脈の立て方があるわけですし。

暮田　線路というのは一直線だけど、文脈は人の数だけある。

杉本　例えば、人間の肉体や命といったものに関するものとかなり近いと思いますね。

暮田　西脇さんが選ばれている「**空の箸箱をしずしず持ち運ぶ／花びらよりも薄いからだで**」、私はこれを読んだときに、自分の体が花びらより薄いというのは無理があるだろうと思ってしまいました。小島さんの解釈を聞いたら、素敵だと思いましたが、空の箸箱を棺に見立てているって、ハイコンテクストですよね。

高橋　ハイコンテクストですね。あの「花びらよりも薄い」が、僕も少しわからなくて読めなかったんです。やはり棺なのかな、これは。

立花　結構ナルシシズムが強くて、棺という、小島さんの評がものすごく光る感じでした。でもこの作品において、空の箸箱を棺に見立てたいのであれば、もっと確実な表現方法があるはずだと思いますが、小島さんの解釈があまりにも面白かったので成立したと感じますね。「花びらよりも薄いからだで」となると、魂だけでということなのか、食べられないので、魂でしか触れられない何かに触れているということなのか。

暮田　箸をなくしたのかと思っていました（笑）。本当に私、詩的ではないんですよね。

小島　確かに、空の箸箱は持ち歩かないですもんね。

暮田　だから、花びらより薄い幽霊のような主体がいて、その主体にはもう、道具としての箸も必要なく、ということ。

立花　もう肉体も、必要なものも全てないというのも、すごく変わったアプローチですね。

暮田　だからこれは、食などを否定していますよね。箸がないと食べられないから。

林　箸箱だけあればいいのかもしれませんね。箸箱があれば、その中に幻の箸があるって。これがもし実在の人間じゃなくて魂だったら。

高橋　ナルシシズムというか、自己愛みたいなものは当然内包していると思いますが、たぶんそれを手放そうとして書いている部分も感じていました。でも、これはやはり自己愛なのでしょうか。

杉本　あまり自己愛は感じなかったですけどね。

立花　隠している、何かもう一歩先の扉から溢れてきた二首なのか、もしかしたら食に関して苦しんだ過去があったようにも思えます。

暮田　例えば拒食症みたいな文脈を与えると、わかるような気もする。

立花　作品の中でも食べていないですよね。

暮田　そうやって読めるようにするのがいいことなのかどうか。

立花　そうなんですよね。ここまで寄ってしまうのは結局成立していない、こちらが用意した物語になってしまう。レトリックにいく自分という方向を今極めようとしていらっしゃるけれど、今度は自身の内面のようなところにアプローチしたときに、どれくらいのものができていくのか、まだ見えないん

ですね。もしかしたら本当に片鱗かもしれない。

暮田　ナルシシズムとは思わないですが、やはり作者のことを言っているという感じはします。「『**右へ倣え**」**の日々のなか／透明なコップは雨を溜めても裸**」は、透明なコップイコール作者だろうという、作者の心というか、そういう心象風景が、全部作者に返っていくように感じます。

高橋　それはナルシシズムというよりも、僕が選んだものに関して言えば、自己批評のようなものかと思っていたんですよ。でも、西躰さんが選んだ作品を見ると、自己愛的な、ナルシシズム的なものが少し強いのかと思ったりもしました。だから、「**履き潰すバレエシューズを／本物の光の繭として胸に抱く**」にしても、わかりやすいんだけれど。

司会　今回は、結果がある意味で自明のような流れで進んでいますので、いちばん多く票を集めている**常田**さんへの反対意見を伺おうかと思ったのですが、反対意見というのもなかなか言いづらいですよね。賛成でも反対でもかまいませんので、ご意見を伺えますでしょうか。

杉本　私は**常田**さんの作品は空間というか、空っぽなところがすごく好きで、例えばこの「履き潰すバレエシューズ」だって、潰す前は何らかの形を持っていますよね。この「箸箱」も空で形を持っている。他にも〝空っぽ〟という言葉が結構出てくる。「**キリンでも飼うつもりなの三月を／こんな明るい吹き抜けにして**」も、一つの大きな空間ですよね。だから、空間を孕んでいるところに大変惹かれるし、そこはいろいろな解釈ができる。肉体と魂とか、あるいは、言葉そのものが空っぽだと思っているところもあります。言葉は空の器で、そこにどうやって中身を注入するかということを、作品を書くときに考えているところもあるので、そういうところに共感もしていて、〝空っぽ〟はキーワード

かなと考えました。

高橋　僕は**常田**さんでいいと思います。今、杉本さんがおっしゃった〝空っぽ〟というね、あの「うつ」という状態については、それほど詳しいわけではないですが、折口信夫（1887―1953）の歌論がそうですよね。「日本語ってものはその空っぽの中から生まれて空っぽに入るんだ」というような。そういったこととシンクロする部分があるとすれば、おそらく**常田**さんという人は、短歌を延々と選択していて、それを書き続けてきたという部分とシンクロするのではないかと思っています。僕は、短歌をあまり読んでいないので力強くは言えませんが、一冊の本として読んでみたい作者だと思います。

立花　「○○は○○」というのが、**常田**さん自身が塚本の作品をリスペクトして作ってみたり、そういう試行錯誤の中にあるものだと思えば、また感じ方も変わってくるのですが。とはいえ、完成しているかというと、崩壊してしまっているという印象はあります。パターンに則った言葉遊びになっている気がするので、ここは少し気になるところではありますが、全72作品のうち、後半20、30作品は本当にいい作品が立て続けにできていたので、私はそこを信じたいと思います。

「**春風のアンダースロー受け止めて／生まれる前の草原にいる**」は、音を取っても温かさを取っても、心の中にずっと残る歌だと思います。私が口語詩句賞で大切にしたいと思うことは、この早い時代に残るかどうか、残す欠片があるかどうかだと思っています。私の推す**塩本**さんの作品は、残す力が強くあると思うので、推したい気持ちはありますが、**常田**さんを応援したいと思います。

西躰　**常田**さんの作品にはまったときの、感情的というか、好きだというところはあるのですが、今言われたような、息苦しさというか、観念的になりがちなところもあります。塚本邦雄を読んでいると、

どんどんしんどくなっていくところがあるんですよね。これはちょっと間違いではないか、というような追い込まれ方を、読み手もしてしまうところがあり、そういう印象は実際にあります。皆さんのお話を伺う中で、私の中では**常田**さんと**石村**さんが双璧という印象で、どちらも推したいところですが、私はもともと**常田**さんを選んでいるので、その考えを変えるつもりはありません。ただ、年齢も含めて考えると、**石村**さんも非常に魅力的だと感じています。

常田さんの作品は、1年を通して20作品以上選んでいるので、そういう意味では、一首一首、その都度「いいね」を押し続けてきた人間の一人ですから、**常田**さんが大賞を取ることに異存はありません。ただ、今皆さんの話を聞いていて、**常田**さんの言葉は〝空の器〟だという考え方をすると、少しわかる気がしたんですね。私が推した**川上**さんや**石村**さんは、言葉の質というか、どういう言葉を使おうとしているのかが見えやすくて、私には近しい感じがしていましたが、**常田**さんはレトリックは見えてくるけれど、作者像がなかなか見えてこない。もともと塚本も、意味読みなど、そういうものをどちらかといえば拒絶するような文体でもあります。

だから、ひょっとしたら**常田**さんの中では、言葉は先ほど言ったような〝空の器〟なのかもしれません。塚本は、その器の中に何も入れないような、テクニックそのものを際立たせる書き方だったのかもしれないですが、皆さんの話を聞くと、**常田**さんはその〝空の器〟の中に、ちゃんと自分を入れている。見えない〝空（から）〟ではあるけれども、そこには何かが入っている、そういう書き方をする作者として認識すればいいのかと思います。ここへ来るまで私が持っていた印象とは違って、もう一度読み直すことができるかなと思いました。

司会　ありがとうございました。それでは、**常田**さんが大賞ということでよろしいでしょうか。はい、では、第7回口語詩句賞の大賞は**常田瑛子**さんに決まりました。

続いて、奨励賞について、大賞候補の残り4名、**塩本抄**さん、**牛田悠貴**さん、**石村まい**さん、**川上真央**さんは、自動的に奨励賞となります。その他奨励賞候補としては、お手元に一次選考通過者の一覧があると思いますが、この10名（**鴛浦るか・大西美優・小川未夜子・奥井健太・互井宇宙論・高田皓輔・にわ・快名・檜野美果子・ムクロジ**）が挙がっています。この中で、「ぜひ加えたい」という方がおられましたら、奨励賞に追加したいと思いますが、いかがでしょうか。

にわの作品

立花　私は**ムクロジ**さんと**にわ**さんを候補に挙げましたが、**にわ**さんは、なんというか、気持ち悪くて（笑）。それがすごく印象に残っています。気持ち悪ければいいというわけではないのですが、気持ち悪さが生まれる理由の中に、哀れみがあるような気がしています。たぶん、ニワトリを飼っていた方かと思うんです。ニワトリが生まれてから一緒に生きてきた時間が、この方の核になってるのかなと思ったのですが、食べ物としても見ているんですよ。「**にわとりのたましいはどこに／いくのかな／チキンバーレル、小さな棺**」も、「チキンバーレルを出すんだ！」と。だから、その愛と哀れみがあって。あとニワトリって、どうしてもその場で糞をしてしまったり、たくさんいると臭いがしたり、汚いものとも受け取れてしまう。今回は、美しい比喩や表現を用いる作者が多かったのですが、その中で、**にわ**さんだけは、ただ一人気持ち悪いと感じさせる作品を書いていたんですよね。

現代に合う狂気だな、と。肉と血と魂、そしてその外側の汚れをとてもしつこく描いていて、「中は美しく、外は汚い」という感覚を信仰しているのかと感じました。ただ、汚いということをベースにしながらも、この「**へなちょこは食べられますよ、／よく噛んで**」にあるような、同情からくる優しさや、「**かなしみは冷凍保存／もうすこし／げんきなときによく煮てたべる**」にあるような、心を大切にしているようにも感じます。それから、「**そっけないやきそばがすき／具がなくて／麺とソースがただそこにある**」。この写実の仕方が面白いですね。私は今回、リアリズムをかなり意識して作品を見ていたのですが、自分の中で成立する世界がある中で、リアルをどこまで追求できるのかということは、これから先、どう生きていくかにもつながっていくと思うんですよね。だから、この世の汚さや気持ち悪さを楽しんでいる感じ、自分の世界の中でリアルを遊んでいるような、ニワトリの糞が混じった泥を泥だんごにしているような、愛しさと汚れを混同している形がすごく良かったので、**にわ**さんを推したいですね。

高橋　立花さんのお話を聞いて、面白いと思いました。**にわ**さんはたしかに変ですよね、変で面白い。

立花　唯一無二性もあるけれど、ちゃんと書いている。

高橋　唯一無二性で言ったら、**ムクロジ**さんよりも**にわ**さんなんですよね。

杉本　「**へなちょこは食べられますよ、／よく噛んで**」の「へなちょこ」って何を言っているんでしょう。

立花　自分の不甲斐なさとか。

杉本　これがニワトリだったら、なんだかニワトリがかわいそうだな、と。

立花　どんなものでも愛しいんですよ、というか、許しをベースにしてるのかな、という感じはしました。

ニワトリではないと思わせながら、実は自分自身のことなんじゃないかと。自分の失敗や不甲斐なさなのかと思ったりします。

高橋　**にわ**さんは、詩形でいうと短歌と川柳なんですね。

暮田　土の匂いがするというか、あまり他の作者にはないように感じますね。そこがいいかなと。

高橋　ぶっ飛んでいる感じが面白いよね。

立花　そうなんですよ。ちゃんと理性もあるように感じますね。だからこそ、信仰がぶっ飛んでいるように見えるんだろうと思います。

高橋　**にわ**さんのような口語短歌というのは、若い方の短歌を読んでいると、比較的よく見られる作風ではないですか？

暮田　学生短歌の文体や投稿歌人の文体、それぞれ特徴があると思いますが、**にわ**さんは、そのどれとも違う印象を受けます。

立花　**常田**さんの方が、形式的にはよく歌人で見られるように思いますね。この方は、どこでこれを得たのでしょう。

暮田　あまり技巧を重んじる短歌では書かない書き方をしていると思うんですよね。

西躰　このド直球というのも面白いですよね。

立花　ド直球なんですけど、視点が、詩を書いてきた人とは少し違っていて、詩的ではないように感じます。

西躰　全然詩的じゃないですよね、それが面白い。修辞が一切ないというような、そこがちょっと興味を引かれたところです。

林　すごくゆるい書き方ですよね。「**このような／カーブを人は曲がれずに／田んぼに刺さっていくんだね、夜**」や「**しぼしぼと／雪のかけらがとけてゆく／フロントガラスはことりの温度**」ね、何かのリズムを作る意味では大切な。

高橋　**にわ**さんって、もっといろいろなものを読みたいという段階ですよね。その上で、授賞に至るかどうかを判断したいと思います。

ムクロジの作品

林　私は**ムクロジ**さんを選びました。最近は、俳句文体の作家で「これは」という人があまりいなくて、短歌文体の人たちの表現が非常に目に付くのですが、俳句文体の作家としては、**ムクロジ**さんは今18歳ですよね、うまいですよね。これは、俳句甲子園で点が入りそうな作品だと思います。「**花冷の糸に重たいティーバッグ**」や「**三月の醤油をはじく目玉焼**」は、「糸に重たい」というだけで、お湯の中に浸かっている様子がわかります。「醤油をはじく」も目玉焼きの質感がわかりうまいですよね。

「**花陰にカレーは飯をまわりこむ**」の「まわりこむ」のルー感、「**短夜の本におさまる栞紐**」は、考えてみれば当たり前ですが、栞紐ってちゃんと本に収まるようにできているわけで、そういう意味では、読み終わって本に収めたのでしょうけれど、あらためて栞紐のサイズ、そういうものが浮かぶ。あと、「**梅雨明けて手前の卵から使う**」、この「手前」ですよね。冷蔵庫に並んだ卵を手前から取っていくような情景が浮かびます。少し異色なのは、「**しゃっくりがおさまったので／帰ります**」。これは俳句というより川柳で書いているのかと思いますが、面白いんですよね。友達のところへ行って、

しゃっくりが出て、友達の力を借りて、やっと治まったので、「じゃあ帰るわ」という。「しゃっくりがおさまったので」という見方も面白い。「**空っ風信号全部青になれ**」とかね。なんだか叫んでいますよね。こういう手放しの叫び方は、もう我々にはなかなかできないですね。

立花　動きがあって目に留まりますよね。最初は「あれ？」と思いながら読んでいましたが、後半になるにつれてすごく動きが出てくる。私は俳句って、写真や絵のような印象で見ることが多かったのですが、動いているんですよね、中で。確実に生きている感じがあって、それがすごく面白いと思いました。**ムクロジ**さんは、俳句としての新しさのようなものが少しありますよね。例えば、「**花冷の糸に重たいティーバッグ**」や「**花陰にカレーは飯をまわりこむ**」もそうですが、ちょっとした機知なんだけれども、その機知が持っている現代性のようなものがある。そこの面白さがある作者ですね。

司会　それでは最後に、もう一度決を採らせていただきます。奨励賞に**ムクロジ**さんを選びたいと思われる方は、挙手をお願いします。では、**にわ**さんについてはいかがでしょうか。はい、わかりました。**ムクロジ**さんと**にわ**さんについては、挙手数が奨励賞授賞の基準に至りませんでしたので、今後の作品に期待していきたいと思います。

最終決定といたしまして、第7回口語詩句賞の大賞は**常田瑛子**さん、奨励賞は**塩本抄**さん、**牛田悠貴**さん、**石村まい**さん、**川上真央**さんになりました。ありがとうございました。

２０２６年度口語詩句奨学金

実施概要・選考結果

２０２６年度口語詩句奨学生

青木日向子、植原拓巳、大西美優、奥田羊歩、金光舞、川上真央、佐久本倫歌、髙田皓輔、互井裕介、田中快、坂野湖春、平川愛弓、松下誠一、渡邉早紀、渡邉美愛

選考委員

暮田真名（川柳人）、小島なお（歌人）、杉本真維子（詩人）、高橋修宏（俳人・詩人）、立花 開（歌人）、西躰かずよし（俳人）、林 桂（俳人）、龍 秀美（詩人）

日程

投稿期間　２０２５年２月１日～２０２６年１月31日
募集期間　２０２６年２月２日～２月６日
選考期間　２０２６年２月９日～３月11日
選考結果開示日　２０２６年３月25日
奨学金給付通知書授与式　２０２６年３月30日

給付額

中学生　6万円
高校生　12万円
大学生（大学院生含む）　60万円

青木日向子（ひなこ）

筆名　青木菓子（かこ）
２００４年生まれ
兵庫県出身
同志社大学文学部美学芸術学科



どこからが悪党だろう
針葉樹ひとつひとつに燃える消印　1

祈りには目深に帽子をかぶらせて
電光掲示板に細い雪　2

保育器にさしこむ指は
月光に濡れて
ハープのまばゆいたわみ　3

ごぼう切るときだけ思いだす童話　4

賞賛の後ふみつぶす蟻地獄　5

モンブラン崩せば口は大聖堂　6

以上でも以下でもなくて青葉闇　7

脳みそを分け入ってみる四畳半　8

てにをはを散らして夜の喫煙所　9

あくびにも二種類あってこれは春　10

（期間中投稿作品39作より自選）

植原拓巳

筆名　上原一樹
２００６年生まれ
群馬県出身
都留文科大学文学部国文学科



溜息のように磯巾着あるく　1

ケチャップを押し出す力沈丁花　2

初夏の潮の匂いの町役場　3

遠くから声で呼ばれて岸の夏　4

花カンナ晴れているから黙りたい　5

電柱が九月の雨に濡れている　6

鳥一羽閉じ込めてある秋の籠　7

閉店の日の白菊を買ってゆく　8

恋人も小人も怠惰冬の水　9

右手にふれてつめたい左手　10

（期間中投稿作品19作より自選）

大西美優（みゆ）



筆名　大西美優
２００１年生まれ
奈良県出身
広島大学大学院人間社会科学研究科
２０２５年度口語詩句奨学生

わる口を言うときのこえ冬かもめ　1
私たちはよっと言い合う仲です梅　2
朧夜の
マフィンぽそぽそしてさみしい　3
啄木忌
こきゅこきゅこきゅ
と皿洗う　4

どうすることもできない
白アスパラ茹でる　5

はつなつの性別欄に枠いくつ　6

すべりひゆ悲しい音のする楽器　7

とっぷりと麦茶よ
愛にヴァリエーション　8

ぼんにゅいと言えば夏木になる獣　9

じゅてーむを繰り返しても夏の風邪

10

（期間中投稿作品72作より自選）

奥田羊歩（おくだようほ）

筆名　ムクロジ
２００７年生まれ
群馬県出身
早稲田大学文化構想学部文化構想学科
２０２５年度口語詩句奨学生



花陰にカレーは飯をまわりこむ　1

三月のくしゃみの前の
一瞬の裏声のような
人になりたい　2

梅雨明けて手前の卵から使う　3

短夜の本におさまる栞紐　4

けんかした手が天牛に触れている　5

自転車で踏んで蛇かもしれなくて　6
空っ風信号全部青になれ　7
亡き人の
ＬＩＮＥアカウントの残る
こーんこーんと叩く地球儀　8
年明けて
McDonald's のDを拭く　9

レシートをまっすぐ折って花曇　10

（期間中投稿作品61作より自選）

金光舞

筆名　金光舞
２００６年生まれ
埼玉県出身
福島大学人文社会学群人間発達文化学類
２０２４・２０２５年度口語詩句奨学生



カクレクマノミが桜になってゆく　1
水馬の匂い捕らえる初老の父　2
優しさを咀嚼するとき
さくらんぼ
みたいにさっぱりすぎて切ない　3
ビー玉は羊が眠る丘になる　4

花火は
骨
のまま還るから
いなくなって
しまう　5

生まれてきたのは私のせい
だから三春駒の
鬣に展く花になりたい　6

着膨れて甘い匂いのおじいさん　7

虫籠の蛙にしつこい火事がある　8

生きてゆく事とは好きを増やす事
こんなにきれいだったかな、雪　9

さよならの度に生き方を忘れる
明日は鳥になれますように　10

（期間中投稿作品71作より自選）



川上真央

筆名　川上真央
２００７年生まれ
東京都出身
早稲田大学文学部文学科
第７回口語詩句賞奨励賞

作品前掲（16頁）

佐久本倫歌

筆名　雲理（くもり）そら
２００５年生まれ
大阪府出身
関西大学文学部総合人文学科
２０２４・２０２５年度口語
詩句奨学生



おちていく幸運ほどに気が抜けて
春のクレープ屋の前に立つ　1

マジックの種を明かして帰るたび
あなたの部屋が遠くなるよう　2

たくさんの国旗をはきだすように
してマジシャンはせせりを食べて
いる　3

盲信のためにあなたは生きていて
終わるまで編み物をしています　4

何者も傷つけながら背を伸ばし
大きな栗の木の下を出る　5

トゥインクル・トゥインクル
手技は見えなくて
あたしが幽霊でもよかったの？　6

花器にさえ装飾がある
身体じゅう
至るところを飾りと思う　7

伸びずともながいうどんを食べな
がら寿命が尽きたあとの話だ　8

百万の胡桃の雨をうけながら
死因はなにか考えている　9

プリンパフェの完璧な造形を見よ
ここから先に無意識がある　10

（期間中投稿作品72作より自選）

髙田皓輔

筆名　髙田皓輔
２００４年生まれ
千葉県出身
中央大学理工学部情報工学科
２０２３・２０２５年度口語
詩句奨学生



菜箸の長さのように眠ったら
もう片方を探さなければ　1

漂着に似た起き抜けの昼すぎの
洗顔までを手繰りよせれば　2

しゃらしゃらと
大根おろしを擦る音で
はぐらかされた夜があったな　3

近づいてみれば蟻から蟻が出る　4

ピーチティーふざけるのを
いい加減にする　5

うんていがうまい友達　古い雪　6

水没のまちにひらがなだけのこる　7

真似すれば鴉に私に喉がある　8

何回もわたしを折って
月に
届くよ　9

ドラマーにドラムの才能　蛇に骨　10

（期間中投稿作品51作より自選）

互井裕介



筆名　互井宇宙論
２００６年生まれ
埼玉県出身
二松学舎大学文学部国際日本・中国学科

川柳はセーヌ川発祥　だけどね　1

恒星に勝ってわたしが産まれたの　2

九九ぜんぶ言えたひとから生前葬　3

雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される　4

木の瘤に木の叩責ある銀河系　5

アンドロイド漱石ひとりでに滝へ　6

どうやって伝記にならず
生き延びよう　7

木耳を食べるフルート奏者たち　8

夜を司書は古い奇書について語り
頷きながら椿は泥へ　9

木星とぼくの義眼でできていく
星座がぼくを見放していく　10

（期間中投稿作品70作より自選）

田中快

筆名　快名（はやな）
2003年生まれ
北海道出身
千葉大学大学院融合理工学府



ドアを這う月あかり
見たことがある、
短編に脱走兵がいる　1

つまずいて
ふと出した手は空を切り
広がる手押し相撲の花野　2

越境を終えた翼のようにして
青い器におくカトラリー　3

アンダンテ
座れば咲いてしまうから　4

雪解けの川のひとつが
（借りていた本、返そうか）
合流をする　5

解凍に葉物は透けて駄目になる
そのとめどない回想と似て　6

会いたさが凪ぐしばらくの、
洗う、干す、畳む、重ねる、
そうして積もる　7

手をとってまた手をはなす／
はなされた手がまた手をとる

渚と呼んだ　8

開閉はくりかえされていて
蓮の花
聴診器かしてください　9

火に寄れば燠に安定してからの
あなたへ一度敬語が混ざる　10

（期間中投稿作品70作より自選）

坂野湖春（ばんのこはる）

筆名　彩燈琴璃（いろとことり）
2007年生まれ
東京都出身
中央大学文学部人文社会学科



俗世でも生きられますか
入水など知らない鶴が白く光って

1

ねりあめがまだ透明で、透明で
毎日透明で、透明で

2

ルノワールの描いた桃が、
少しだけ林檎みたいだ、
心臓を喰む

3

パールグレイの
珊瑚がねむる水底へ
あなたはゆるく睫毛を下げる　4

金色は内光りして澄む夕座　5

曇天は鋏を研いでしまうから
あなたと上手くしゃべれなくなる　6

海賊の手から手をゆく
宝石の傷に
溢れんばかりの祈り　7

風のない眠りに胸は重湯なの　8

野菜ジュースのための広い公園　9

真昼間に茹で大根が透けていく
また占いは少し当たって　10

（期間中投稿作品44作より自選）

平川愛弓

筆名　森川紬
２００２年生まれ
福井県出身
同志社女子大学薬学部医療薬学科



人見知りだった夢を見ました
憐憫のように寄ってくる
犬の甘噛み　1

記念碑に初雪として名前降らせる　2

カヌーは傾いて
なぜか涼しく軋むから
貴方がこちらに来たとわかる　3

ぽっかりと
無人の夕方で息をする
雨のグラウンド　4

胎動の一音を聴く母となるひと
駅の屋根にまるい光が落ちる　5

今朝は一つ結び
ねむると優しく離れてゆく
たんじょうび　6

深海によばれるように
スロープをゆっくり降りる車椅子　7

満月のふもとまで
抜け殻になった湖を寄せて
絵にするから待ってて　8

ほっとみるく
あったかいのは
おとうとが
ミトンをはめて運ぶから　9

名前を知る前の
貴方を纏う
貴方らしさ　10

（期間中投稿作品54作より自選）

松下誠一



筆名　松下誠一
２００２年生まれ
東京都出身
東京電機大学工学部第二部電気電子工学科
２０２２～２０２５年度口語詩句奨学生
第５回・第６回口語詩句賞奨励賞

口下手で梅のしたまで来てしまう　1

音域の届かないミモザになるの　2

薔薇の咲く体になったころですか　3

梨になるための座学のながいこと　4

空洞のからだを野辺に診てもらう　5

不義理してしまいましたが夏野原　6

見るからに心因性のカタツムリ　7

ハルニレに於かれましても只の鬱　8

眼科医にそばの花だと見抜かれる　9

粉状にしてから冬をほのめかす　10

（期間中投稿作品37作より自選）

渡邉早紀

筆名　マズルカ
２００２年生まれ
滋賀県出身
筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群
２０２３・２０２５年度口語詩句奨学生



新しい神話が呪いとなるように
子育て雑誌のまぶしい聖句　1

告解のさなか北窓雪に濡れ
これがほんとの海のはじまり　2

死ぬときは何時も一人だ
アンパンマン
だからごはんはふたりでたべる　3

この辺にポチを埋めたの
あの秋に
いま銀桂の花を降らせて　4

蛍光が切れてひとつの輪となった
灯を捨てに行く日の驟雨　5

育児書もそよ風孕む時が来て
夕方五時の秋の古書店　6

緩やかな延命治療のミケの眼に
初めておれとの時間が映る　7

制服を脱いで僕らは旅立った
「あなたらしく」の判を押されて　8

未熟児の体内時計も午後を指す
いじめを許したあとの給食　9

「俺のため
あるんじゃないんだ天国は」
犬より安いシャンプーを買う　10

（期間中投稿作品38作より自選）

渡邉美愛（みえ）

筆名　さいう
２００５年生まれ
愛知県出身
金沢大学人間社会学域人文学類
２０２１・２０２３～２０２５年度口語詩句奨学生
第６回口語詩句賞大賞



斎場
へ
影を蹴りつけ向かうとき
ちきゅうはひかりまみれの樹海　1
瘡蓋をやぶりエーデルワイスの火　2
なつに至る、までの
むげんのあぜ道を
たゆたう ぇふぃらくらげの君だ　3

大西日振れてパノプティコンの鐘　4

抱きしめて
　みれば
あやうい自我に棲む
ちょうがいこつはがらすのひつぎ　5

ろっこつのかたち
に
鳥をまもるとき
けやきの喉はよくしなる　弓　6

座り込めば
つぎつぎあざみの咲く
膝
をかかえて祖父を病棟に待つ　7

呼吸器に似ていちめんの二季草　8

誰もかれも
理智の奴隷と思うとき
ファム・ファタールの夕闇が来る　9

たんぽぽの蔭
いちまいのしんらいが
欲しくて、むねに手を差しいれる　10

（期間中投稿作品72作より自選）

選考総評

暮田真名

今年度奨学生となった15名の作品には、大づかみにいえば青春詠・社会詠・見立て・無意識・定型意識など、いくつかの傾向が見られた。

青春詠というういいかたもどうかと思うが、青春詠と社会詠は自他の問題を扱うという点で地続きである。前者は手の届く距離にいる他者と自分の関係にスポットを当てる。「自分の他者性」にまで話が及ぶと、後述する「無意識」グループに接近する印象がある。後者は鳥瞰した視点で社会の中にある自分を見つめる。

「見立て」と「無意識」は逆向きの表現である。今年度の口語詩句賞を受賞された**常田瑛子**さんは、まさに「見立て」の作家だった。選考会では高い描写力が賞賛される一方で、ともすれば「見たいものを見る」ような恣意性に陥るのではないかという指摘がなされた。「無意識」に依るのはその反対で、世界のわからなさをわからないままに書くことができるが、そのぶん伝達性は落ちる。わたしは後者のやりかたに期待を寄せる者である。

ここからは、いままで挙げた順番に作品を見ていく。

金光舞

幸せそうって／あなたが言ってくれるから／ポップな河童みたいに笑う
着膨れて甘い匂いのおじいさん

川上真央

藤の色をすみれの色で喩えては／一人称がゆらいでばかり

物言わずカフェが翳れば／人びとは／水仙のごと起きあがりゆく

金光舞さんの作品には、「なりたい」「生きたい」という願望の言葉がたびたび現れる。いまここにある自分のあり方、生き方に納得がいかず、なにか別のものに変身したいのだ。「ポップな河童」、「甘い匂いのおじいさん」というカオスには、現状を揺るがす兆しがあらわれているように見える。

川上真央さんの作品に頻出するのは「きみ」「あなた」という二人称で、ジャンルとしては「相聞歌」だと思う。「藤の色〜」は身近な他者の視線を使って自らの輪郭を

描こうとする不確かさをよく表している。「物言わず〜」はたまたま同じカフェに居合わせただけの薄い関係の他者を書いているぶん、時間経過や空気感にピントが合っていて、この方向性を追究してもおもしろいのではないかと思う。

大西美優

生存という名のキャリア／猫じゃらし
はつなつの性別欄に枠いくつ

マズルカ

勉強に明け暮れていた／人だけが探せる花もあるよ
／馬より
「俺のため／あるんじゃないんだ天国は」／犬より
安いシャンプーを買う

「生存という名のキャリア」は、一般的にはただ生きて

いるだけでは「キャリア」にならないことを、「性別欄に枠」はセクシュアルマイノリティを無視する制度への告発を内包しており、重い。しかし、「猫じゃらし」や「はつなつ」「枠」「いくつ」のu音のリフレインは歌うように楽しげで、そこが**大西美優**さんのユニークなところである。

「馬」や「犬」といった人間社会の外にいる生き物を通して人間を見、人間のかなしみやおかしみを描こうとしている。**マズルカ**さんの作品の中では、皮肉が前面に出すぎるものよりも、このように寓話的な読み味を持つものを好ましく思った。

快名

立ち漕ぎに変える瞬間とんでゆく／麦藁帽、ありがとう、麦藁帽

受け売りの感情を曳く／筆圧は／なぞりがきドリル
をさまよって
さいう
性欲をやめて／ひかげに見つめれば／ましろいサラ
ダボウルのきみだ

森川紬

シンクに訪れた／漏斗のような百合を切るひと

「受け売りの感情」と「なぞりがきドリル」の類似性。永田和宏が「問いと答えの合わせ鏡」と言ったところの、王道の書き方である。個人的には、風に飛んでいく麦藁帽のような歌に可能性を感じた。

昨年の口語詩句賞受賞者の**さいう**さんは、今年は神話など外国文学のモチーフが目を惹いた。「ましろいサラダボウルのきみ」は不思議な表現だが、いわば内臓の容

れものである人体に対して、葉野菜の器というのは、どこか人間離れした聖性を思わせるところがある。

百合の形状を「漏斗」と見抜く力は見事。**森川紬**さんの作品には料理や台所に関する言葉が多く、たしかな手ざわりを感じた。この手ざわりを足場として、さらに独自の表現へと進んでいける作者だと思う。

雲理そら

百万の胡桃の雨をうけながら／死因はなにか考えている

ふくらんだわかめにどんどんのま／れてく部屋からでなきゃ／もう受け入れなきゃ

髙田皓輔

夢の中で蟻に噛まれた指先の／あたりがずうっとかゆい　もう昼

ピーチティーふざけるのを／いい加減にする
青木菓子
脳みそを分け入ってみる四畳半
モンブラン崩せば口は大聖堂
彩燈琴璃
真昼間に茹で大根が透けていく／また占いは少し当たって
風のない眠りに胸は重湯なの

雲理そらさんの作品も、青春詠と呼ばれる領域をベースとしながら、しかし世界のわからなさを体当たりで受け止めているような印象を受けた。これからもわけのわからなさを大事にしてほしい。

高田皓輔さんは、短歌でも川柳でも存在感を発揮していた。特に最近の作品は、社内生活を送る上ではなかっ

たことにされるような意識のブレを言葉にうつしとることを試みているようで、頼もしい。

「脳みそ」も「口」も、無理矢理に言ってしまえば「内側」である。**青木菓子**さんの作品は、「内側」に光を当てることでかえってそのブラックボックス性を明らかにするようで、挑戦的。

彩燈琴璃さんの作品のモチーフは全体的にオレンジがかってキラキラしており、キッチュである。その光が曇りガラスのようなもので一枚隔てられているときに、もっとも魅力を放つのではないか。

松下誠一

心臓が／もち巾着のきゅっとなる／なみだなみだの
夜にございます
梅林にあなたいつまでそんなふう

上原一樹

恋人も小人も怠惰冬の水

溜息のように磯巾着あるく

互井宇宙論

川柳はセーヌ川発祥　だけどね

どうやって伝記にならず生き延びよう

ムクロジ

竹林をのびちぢみして石鹸玉

しゃっくりがおさまったので／帰ります

松下誠一さん、**上原一樹**さんには、いつも川柳表現、俳句表現の可能性を見せてもらった（「心臓が〜」の一首は短歌だが）。

「にござります」「あなたいつまでそんなふう」といったやや時代がかった言い回しが、**松下**さんの手にかかれ

ば不思議なほどの「うっとり感」を帯びるのを、驚きながら見ていた。昨年の口語詩句賞の選考会では「時実新子的」と評したが、もはや独自の領域に足を踏み入れていると感じた。

上原さんの作品の魅力もまた、「うっとり感」かもしれない。磯巾着が歩いているのは海だろうし、「冬の水」も冷たいはずなのに、どこか眠りに落ちる前のような快さがあるのだ。

互井宇宙論さんの川柳には、本当は「柄井川柳」という人名がもとになっている「川柳」を「セーヌ川発祥」と嘯いてみせるような、権威へのおちょくりが見られる。その裏には個人の物語化への強い警戒があるのだろう。ぜひ、川柳を書きつづけてほしい。

ムクロジさんは、シャボン玉の「のびちぢみ」、「しゃっ

くり」など、妙に些細なことをキャッチするアンテナがあり、打率の高い俳句を発表しつづけていた。

一年間の作品の投稿、おつかれさまでした。

惜しくも漏れてしまった方々も含め、新年度もみなさんの作品を心待ちにしています。

小島なお

川上真央

新幹線は遥かな川面／ゆるやかに／耳の鍾乳洞を開いて

互井宇宙論

ホログラムですが献血したいです

快名

手をとってまた手をはなす／／はなされた手がまた手をとる／／渚と呼んだ

さいう

性欲をやめて／ひかげに見つめれば／ましろいサラダボウルのきみだ

青木菓子

モンブラン崩せば口は大聖堂

人工知能の発達により人間がＡＩに代替されてゆく

なかで、人間の最後の砦とも言える身体性は今後ますます重要なテーマになってゆくだろうと思う。最大時速３００キロを越える新幹線の速度の地平を「川面」と捉え、水平を滑ってゆく身体の浮遊感から自らの三半規管に古代の時間を内包する空洞を見いだす。ヴァーチャルな空間におけるアバターはホログラムのように私という三次元の情報を立ち上がらせる。肉体のない人間が他者を救えるのか否か。時代的な問いへ繋がるはずだ。手を繋ぐ。他者の身体に触れるいにしえからの営み。波が打ち寄せる渚もまた古くからの地球の営みと言えるだろう。肉体に否応もなく宿る性欲の生理は、ときに相手を歪めて認知してしまう力を持つ。もしも性欲を「やめる」ことができれば。清潔で無機質なあなたを見いだすことの安心と寂寥の狭間で精神は揺れ動く。美しいモンブラ

ンの造形を崩すとき、口のなかに繊細で脆く絢爛な建造物が意識される。壊れてゆく美にパイプオルガンや鐘やステンドグラスが共振しながら鳴り響いている。

松下誠一

春が終わり、／夏が終わり裸足のきみ／と／安全なエリアで波を聴く

雲理そら

盲信のためにあなたは生きていて／終わるまで編み物をしています

髙田皓輔

トランプのように季節は配られて／あなたはわたしに選ばせたがる

金光舞

生まれてきたのは私のせい／だから三春駒の／鬣に

展く花になりたい

森川紬

今朝は一つ結び／ねむると優しく離れてゆく／たんじょうび

偶然にこの世に生まれ、必然に時代のなかで生きること。災害やテロリズム、戦争や事件が時代の精神を少なからず形成してきた。「安全なエリア」という言葉がもたらすものは。避難区域や最大遡上高は震災の記憶とともに口にされる言葉になった。避難マップが各家庭に配布される日常において私たちの「安全」は今後も変わり続けてゆくだろう。「盲信」の言葉のなかに宗教や信仰は含まれるだろうか。信仰のために大勢の命が奪われ続けている今、何かを誰かを信じる危うさにどう向き合うべきか。同じ編目を繰り返す作業をささやかな日々の比

喩ととるべきか、無心の没頭を別の信仰と受け取るべきか。偶然の采配によって配られたはずの季節のなかで、あなたは恣意的に私の選択を動かそうとする。それは政治にはじまり恋愛にいたるまで逃れようのない事象だとわかりながら、おそれつつ相手の心を見据えてしまう。自己責任という言葉は、加害／被害の境界が曖昧になるほどに大きく響く。生まれてきたことさえも自己責任ならば。長生きや、子を産み育てる願いは一体誰に帰属するものなのだろう。生きることは死へ接近する営為だ。言い換えれば誕生日から刻一刻と遠ざかってゆくことでもある。今朝を重ねて、生まれた岸辺に繋がれていた舟はいつのまにか沖へ流されてゆくのだ。

ムクロジ

花陰にカレーは飯をまわりこむ

大西美優

おすしひとつ交換しよう／はだら雪

彩燈琴璃

真昼間に茹で大根が透けていく／また占いは少し当たって

上原一樹

ケチャップを押し出す力沈丁花

マズルカ

大学にまだ愛されている楔

よく見ること、観察することは詩歌の基本であり、幾度も立ち返るべき原点であると感じる。何を思うかよりも何を見るかのほうが内面を饒舌に語り得る可能性がある。緩やかな白米の丘のめぐりを回り込むカレー。花影の光陰の色彩とゆっくり移動するとろみの

あるルーのスローモーションとが不思議にゆたかな気分を味わわせてくれる。相手と食べものを共有するふくよかな時間の膨らみ。ふわりと酸っぱいお寿司のシャリとはだら雪の冷たい白さとが感覚の裏側で遠く繋がる。何気ない一言の持つ力が場面を立体的に立ち上げる。煮ることで柔らかく透けてゆく大根。占いに予言された自分の向こう側はどのような景色だったのだろう。大根と未来とが淡く重ねられるユニークな詩的構造。ケチャップと沈丁花、呼応する音感が魅力的だ。押し出されるチューブ容器と「沈」の字。発想の糸を探りたくなる飛躍の楽しさは詩歌の与えてくれるよろこびの一つだろう。楔は木製のドアストッパーと解釈した。「まだ」にはすでに主体は愛想を尽かしている様子がうかがわれる。「愛」の概念の汎用性にも注目した。

杉本真維子

俳句、短歌、川柳、現代詩、それぞれの「ジャンル」（古めかしい言葉だ）によって詩的深化の捉え方が大きく異なる。詩人には高く評価される高度なレトリックも、歌人には嘘っぽいものに見えたりする。先日の選考会ではそのギャップのようなものについて大変考えさせられた。そのなかで少しずつ私なりの「口語詩句」が見えてきた感じがある。もちろん定義はまだない。互いを隔てる「壁」などそもそもないのかもしれず、だからこそ「口語詩句」はいまだ過激なものとしてかがやいている。

高田皓輔

十二支に入れなかった動物の／話をしてもしょうがないから

「話をしてもしょうがない」という投げやりな感じがおもしろい。呆れているのでも、ばかにしているのでも

ない。つまり感情ではない。体温のようなものが言葉の姿をしている。

ムクロジ

自転車で踏んで蛇かもしれなくて

「しれなくて」の余韻が秀逸だ。通り過ぎてしまった、という事後をひきずるところに蛇の長さが繋がっていて、とてつもなく長い車輪跡が道の上についていく。

川上真央

黒鍵を押しこむような／はげしさを／灯し／あなたは無言を選ぶ

半夏生ざわざわ満ちる／日盛りの／人影にふとあやうい淀み

改行にたしかな意味がある。何も言っていないはずの空白の部分に言葉が溢れている。

雲理そら

さわれない花から順に水をやる

さわれないことへの代償として水を先にあげるのだろうか。さわることと愛が予め結ばれていることに安堵する。

マジックの種を明かして帰るたび／あなたの部屋が遠くなるよう

知ることのさみしさ。知らないことの豊かさ。言葉のバランス感覚が魅力的だ。

うたた

迷いつつ惑いつつ飛ぶ蝉がいて／すべてのものはめいわくらしい

山盛りのカレーひとりで平らげて／夢を叶えることはくるしい

心に残るリアリズム。異なるおもさの言葉が等しくま

ざりあっている。

つぎの作品も優れていた。**松下誠一**さんは相変わらず一捻りのパワーがすさまじい。**互井宇宙論**さんは巧緻な音韻で魅惑的な世界をつくっている。

松下誠一

サザンカの為にならなくとも笑う

互井宇宙論

かわるがわるかるがもに魔術
雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される

なお、選外だが、「**切りたての桃に子犬の息速く**」（**彩燈琴璃**）、「**名画見る時／その一色目の絵の具を／いつも妬んでいる**」（**蛙多楓太**）も印象に残った。それでは皆様、これからもどんどん自由に書いてください。

高橋修宏

昨年度の選考評において、「〝口語〟の領域には、まだまだ未知の沃土が予想以上に広がっている」と記しましたが、今年度の投稿作品を振りかえると、そんな「未知の沃土」を予感させるような作品に数多く出会えたことが、何より嬉しく感じました。

新しい言葉の感性を携えて登場してきた投稿者が何人もいる。その一方、これまでの奨学生のなかには、すでに作家と呼べるような域に達しつつある方もいるのではないでしょうか。

選者としての私自身も、〈選〉によって試されていることを肝に銘じながら、これからも各々の多様な〈可能性〉という点に注意をはらいながら、選考に取り組んでいくつもりです。

次に、奨学生に選出した方々の作品に短評を記すこと

で、この度の選考の責を果たしたいと思います。

松下誠一（大学生）

祝日はひとえに昏れて手の淫ら
芸名があれば湯船に浸かれます
水槽はさびしく満ちて月に影
空洞のからだを野辺に診てもらう

昨年度の口語詩句賞奨励賞受賞者。一貫して川柳体で発表しつづける作者。昨年、俳句として選考した際には疑問に思う表現も見られたが、今年、あらためて川柳として眺めると年々熟達しているように思う。また昨年、指摘したコピー表現との類似性からも明らかにふっ切れたようである。新たな川柳作家の誕生さえ予感させる作者だ。

川上真央（大学生）

こわされた一人称で／歩くとき／あなたに解けたままの靴紐

冬の朝／あなたの母語の音階で／少しふくらむわたしの名前

夕焼ける／ように／毛布をかけられて／あなたに託したい街がある

今年度の奨励賞受賞者。主に短歌体による作者。どこか危うさを含んだ、青春性と呼べる瑞々しさに溢れた作品に注目した。ここでは「あなた」という人称を含んだ作品を抄出したが、そのような場が作者にとって、かけがえのない根拠と呼べるもののひとつなのかもしれない。今後の展開が楽しみな作者である。

ムクロジ（大学生）

年明けて／McDonald's のDを拭く

空っ風信号全部青になれ
自転車で踏んで蛇かもしれなくて
けんかした手が天牛に触れている

今年度の奨励賞候補になった作者。俳句体の作品を抄出した。定型を巧みに活用しながら、ふと日常に訪れる裂目や異和の感覚を捉えている。また、俳句的手法のひとつである写生により、ときにトリビアルとも言える光景を捉えながら、不思議な世界の感触を表出させている。今後の展開が期待される作者だ。

雲理そら（大学生）

うつくしい群れに馴染んでいく人／に手を振ったって笑うだけだよ
トゥインクル・トゥインクル／手技は見えなくて／あたしが幽霊でもよかったの？

その橋をわたりきれない声たちが／光るぶんまで手をふりたいよ

短歌体のみを抄出した。どの作品においても、口語文体を自在に活用しているように感じた。たとえば文末の「よ」、「の」などの選択のためかもしれないが、相手に対する呼びかけ、あるいはダイアローグへの志向が、すでに作者の文体の根幹にはあるのだろう。軽やかでありながら、批評性を秘めた短詩にも通じる文体には可能性を感じる。

互井宇宙論（大学生）

木の瘤に木の呵責ある銀河系
雲丹飲んでしずかに紺となる夜空
雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される
からくりに似てからみあう霞草

俳句体のみを抄出した。漢語や音韻の活用など、言葉そのものに対するこだわりを感じさせる作者。どこか現代におけるマニエリスムとも呼べる気配さえ漂わせるが、定型そのものから立ち上がる魔術的な世界には注目させられた。

高田皓輔（大学生）

真似すれば鴉に私に喉がある
水没のまちにひらがなだけのこる
吹き替えのような水辺にふる小雨
近づいてみれば蟻から蟻が出る

俳句体のみを抄出した。ただ、俳句の特徴的な手法である〈切れ〉は、あまり目立たない。そのことでシームレスな読後感を与えながら、省略による強度からは世界の不可思議な手触りが立ち上がるようである。

快名（大学院生）

つまずいて／ふと出した手は空を切り／広がる手押し相撲の花野

解凍に葉物は透けて駄目になる／そのとめどない回想と似て

手をとってまた手をはなす／／はなされた手がまた手をとる／／渚と呼んだ

ここでは短歌体のみを抄出した。身体など事物への微細な眼差しから、ときに思いがけないワンダーな世界が広がっていく。その引き伸ばされた時間性が面白く感じた。言語的なマテリアリズムとも呼ぶべき作者か。

大西美優（大学院生）

フェミニストです、そして／黙るほどの／雪

はつなつの性別欄に枠いくつ

凍星が撫でる名の無い無精卵
婚姻に押しのけられるシネラリア

主に俳句体による作者。とりわけ今年度の作品では、掲出したように「性別欄」、「無精卵」、「婚姻」など、性やジェンダーをめぐるモチーフに注目した。それらと季語を取り合わすことにより、批評的な強度を秘めた作品を立ち上げている。

さいう（大学生）

あるじの死／だけを／覚えているねこの／振れるめいおうせいの眼球
打ち明けるべき／こと／幾多降り積もり／かいがらぼねへしずめる遺跡
ろっこつのかたち／に／鳥をまもるとき／けやきの喉はよくしなる　弓

昨年度の口語詩句賞大賞受賞者。四行の特徴的な改行により比喩をくり出す修辞的な作風は、確実に進化しているように感じた。掲出した名詞（体言）により終止させるスタイルは、ひとつの完成の域に達しつつあるのではなかろうか。今後、まとまった作品集（歌集）としての評価も期待される作者だ。

金光舞（大学生）

さよならの度に生き方を忘れる／明日は鳥になれますように

花火は／骨／のまま還るから／いなくなって／しまう

体躯に囚われて／震えるたびに解けてゆく／青い鬼灯として／／生きてゆきたい

ここでは短歌体のみを抄出した。どこか喪失感とそれに伴う自己愛を包みこみながら、瑞々しい青春性を表出

させる。また、何より書くことの楽しさを感じさせるのも作者の美点か。一方、改行については、まだ検討する余地があるように感じる。

青木菓子（大学生）

てにをはを散らして夜の喫煙所
賞賛の後ふみつぶす蟻地獄
以上でも以下でもなくて青葉闇
脳みそを分け入ってみる四畳半

俳句体のみを抄出した。「蟻地獄」、「青葉闇」などの季語が含んでいるものの、俳句と川柳の境界を行き来するような作品が目立つ。ナンセンス、痛烈なアイロニー、そして意味のゼロ地点など、そのユニークな作風に注目した。

森川紬（大学生）

撫でている撫でられている犬／使徒が来るなら私から
君の眼差しが外れるところで／警鐘のような金木犀
の匂い
白い引っかき傷を浮かべ／入江の空には猫が住んでる

短歌体のみを抄出した。どこか日常の叙景のようでもありながら、不意に異なった次元が介入するような作品が魅力的だ。掲出作の「使徒」、「警鐘」、「猫」などの事物や存在が、異次元への入口となる作風に、とりわけ注目した。

立花開

今年度は、観念世界を深く描いた作者が多かったように思う。そこではすべてが自由だ。詩の筋力はどこまでも強くなり、羽ばたくことができる。どのような表現世界を持ち、自由に浸り遊べるかは非常に大切だ。楽しむ心こそが新たな表現を見つける力の源になるし、「帰る居場所」を持っておくのは自分のためになる。けれどそこは、作者のみで完結してしまう危うさも含んでいる。自身の世界を確認した後は、再び〝この世〟に戻り、〝この世〟の物に触れ描きたい。作者の表現世界と読者とを結ぶものを増やすことが、自身の詠み幅や視点を増やしていくと感じている。

「流れが速く物に溢れた現代において、どのように詩のヴェールをかけるか。新しいものが次々に生まれては消えていく中で、奇を衒うではなく、丁寧にスケッチす

ることにまた戻りつつあるのではないか、と考える。手触りという感覚をどのようにスケッチするか」奨学生についても、口語詩句賞と同じ上記の定義から選出した。

特に心に残ったのが**川上真央**氏、**髙田皓輔**氏、**快名**氏の三名だ。

川上真央

①クリームで／ふちどるように／駅までを／二人おおきく周って帰る

②からあげ棒／ほとんと合わす／聖火って燃えているかは／関係なくて

③喉仏ずんと押し込む／居眠りのひとが／祈りの角度をかする

④夏霧にさらし／泣きあと糖衣めく

①歩く軌道がクリームの甘さ、柔らかさを持つ。「お

おきく回って」に二人ならどんな時間も豊かに過ごせることが伝わってくる。②「聖火」において重要なのは繋げることだと考える作者。生涯で聖火を持つことはないだろうが、からあげ棒を合わせることによって何かを繋げた感覚を得る。③「ほとん」「ずん」など擬音が独特だが、力加減が巧みで読み手によく伝わってくる。「祈りの角度」と同じであることを発見した。④泣き暮れて、泣き止んだ後の頬のつっぱる感覚。涙は塩辛いものだが、夏霧にさらすことで甘みを帯びる。体験から得たものを詩に昇華させた。

高田皓輔

①水没のまちにひらがなだけのこる
②何回もわたしを折って／月に／届くよ
③ぼくらとは違う理由で黙る森

①生き延びたもの達だけで生きていかなくてはならない。何もかもが水に沈んだ「まち」で生き残った「ひらがな」。表記の中で最も優しく、しかし弱いひらがなは絶滅の一途を辿るのかもしれない。けれど、そこに至るまでは生き続けるしかないのだ。②紙を四十二回折れば、理論上は月まで届く。「私」を無機物と同じく扱い、淡々と折る対象として見立てるグロテスクさ。「届くよ」と語りかけるには、一度経験しているはずで、無傷ではないだろうにまた望む。③同じ行為でも、種ごとに理は違う。我々人間と「森」とでは沈黙の理由は当然違うのだが、それは即ち起こす行動ももちろん違うということ。似た表情をしながら、突然牙を剥かれる可能性もある。

快名

①凪から凪へ／何年先の泣き方で泣き尽くしても／

航路だったよ

②アンダンテ／座れば咲いてしまうから

①万策尽きた後の凪。どの泣き方をしても道が同じであると知ったとき、心だけは遠くを臨みながらももう足は動かない。後悔がないのは「泣き尽くす」ことだろうが、このあとの生きる力を、忘れる方法を、心は分からないかもしれない。②咲いてはいけないものが芽吹いている。目を向けず、枯れさせなくてはならないことを作者は知っており、どうにか立ち止まらず進み続ける。アンダンテとは音楽用語で歩くような速さでという意味。朗らかな表現に使われるが、作品の中では意図的に何かに蓋をし、朗らかな世界を維持している危うさを感じる。

松下誠一

①花韮が散ればそういうことだから

②口下手で梅のしたまで来てしまう

後から聞かされる決定事項の残酷さ。「〜だから」と言われると、もう覆せない気がする。根拠も本人しか納得できないような理由で、結果もどうなったのか分からない。他者へ伝えているようで、自己完結の極みである。なのに、なぜか受け入れてしまう迫力がある。②素朴で、人の心と梅の美しさが際立つ作品。話したいのに言葉が出ず、無言で歩き続けた先に咲いていた梅の花を二人で見上げる。「来てしまう」に苦し紛れに歩き続けたことでたまたま行き着いたのだと分かるが、同じ感動を共有することは、時に言葉を交わすより心の距離を縮めてくれる。

ムクロジ

泣くための時間が少し要る二月

父親の介護か病気の看病をしているであろう作者。肉親が弱っていく様を間近で見続けていると何かが麻痺していってしまう。共倒れしないための防衛なのだが、当事者にしか分からない苦悩があるのだ。家の中で完結しているからこそ追い詰められてゆく。苦しさが日常化してしまい涙も出ない日々の中にも、どうしても泣きたいときがある。けれど泣こうと意識しなければ心の動かない事実にも愕然とする。時間をかけてようやく流れた涙は、どこまで自分の心から遠ざかったものなのだろう。

大西美優

蓑にくるまれて金箔色のゆめ

一読して地蔵のことだろうか、と思ったが、「ゆめ」そのものを具体化したものにも読める。金色よりまろみのある金箔色に「ゆめ」が安寧の表情を浮かべているであ

ろうことが伝わってくる。誰かによって掛けられた「蓑」に守られる姿。優しさの具体の蓑である。

青木菓子

泣き顔を対向車線にだけ見せる

　対向車線の運転手などこちらを見ていないだろうに。そんな対象を相手にしか泣き顔を見せられないのなら、誰の前でも泣けないのと同義だ。ほとんど見られていないと知っているからこそ泣ける、もしくは一瞬だけ目に入り、自分の悲しみを見てもらえるかもしれない。そんなある種の祈りを頼りに泣きに行く。孤独な作業の中にのみ救いを感じているのだ。おそらく夜、対向車線のライトに照らされたむき出しの泣き顔こそ、この人の本質が解放された瞬間なのかもしれない。

上原一樹

閉店の日の白菊を買ってゆく

終わりの日は、やはり何事も悲しい。長く通った八百屋でも、街を潤すスーパーでも。自分の食を支えてくれる場所は命を支えてくれる場所である。閉店となればセールがあるだろうが、そこで買い込むことはせず、白菜を一つだけ買い赤子を抱くようにかかえて自宅へ帰る。悲しさを形にしたような、ひんやりとした重みのある美しい白菜だろう。冷蔵庫に仕舞われ扉を閉めた暗がりの中で、思い出と共に眠る。

惜しくも賞は逃したが、推していた作者を挙げていく。

箭田儀一

ポタージュになればすべてが／同じ色になってしまう事の静けさ

回る卵

水かきの無い手／宇宙に戻る体温／少しずつ忘れることが／どうして必要だったか

八尾保醒

切れてから動脈だとわかった秋

蛙多楓太

エンドロール見る人髪をとかす人

ちねんひなた

ライカどくだみを見て／ライカ目をつむるようにあらゆる／さいわいを

秋山颯汰朗

赤子抱く／余分なものがしみぬよう

榎本佳歩

約束をしよう／秋のあなたになる前に

西躰かずよし

２０２６年度口語詩句奨学金の選考では、書き手の層が、これまで以上に厚くなったという印象を受けた。それにともない、ジャンルを超えた様々な作品が見られるようになった。そして全体の印象だけれども、応募制限から来る口語表現ならではの良さや、行替え、かな表記、オノマトペなど、おのおのが様々な表現にチャレンジしている様子がうかがえた。それは、とても喜ばしいことだと思うけれど、思うところを少しだけ伝えておきたい。

まず口語詩句への応募は、インターネットにおける投稿が基礎になっているので、作品の入選の可否はひとつの作品ごとに決まる。でも、奨学生の選考は、書き手の全作品を見たうえで判断するので、入選の作品数が多くても、奨学生の対象からはずすこともあるし、入選数は少なくても奨学生に推すこともある。つまり、単体の作

品では、いいと思うものがあっても、応募の全作品を見て、書き手として一定の水準に達していないと判断した場合は、選考外になるということが起こる。逆に、単体の作品ではあまり大きな印象を残さなくても、連作として書き手のしたいことや、表現したいものが明確に感じ取れるような場合は、そちらが選考に残る場合もある。短詩、短歌、俳句等では、作品自体が短いので、どうしてもこういうことが生じる。また、当然、選考委員によっても評価の基準は異なる。ジャンルを横断した、それぞれの書き手が選考をしているので、とりわけそれは顕著になる。すぐれた書き手が、複数の選考委員から評価を得るのと同じ程度に、わずかな選考委員だけが、まだ見ぬ新たな書き手を見出すといったことも起こるのではないかと思う。

だからこそ、みなさんには選の可否だけにとらわれることなく、自身の表現したいものをつきつめていってほしい。字数制限だけで、ジャンルの制限のない、ネットによる投稿なので、応募のしやすさはあるかもしれないけれども、逆にそれが表現の足かせにならないようにと思う。それともうひとつ。書くジャンルは自由だし、複数のジャンルで活躍する書き手も多くいる。でも、自身の書く形式において、その方法でしか表現できないものを、ぜひつきつめていってほしい。書くことが幸せとは限らないし、書かないことが幸せとも限らない。ただ、そのあたりまえの地平で、それでも書きつづけることは間違いじゃない。なんの根拠もなく、ただリングに立ち続けることになるかもしれないけれども、それはかっこわるいことじゃない。たぶん僕もそんな場所にいる。

最後になったけれど、惹かれた作品をいくつか紹介して、この選評の締めくくりにしたい。あらためて、これらの作品に出会えたことを幸せに思う。

金光舞

生きてゆく事とは好きを増やす事／こんなにきれいだったかな、雪

高田皓輔

うんていがうまい友達　古い雪

ムクロジ

レシートをまっすぐ折って花曇

さいう

青春の死因／を／語る窓にいて／ぼうくうごうの昏がりが来る

川上真央

冬の朝／あなたの母語の音階で／少しふくらむわたしの名前

大西美優

すべりひゆ悲しい音のする楽器

上原一樹

右手にふれてつめたい左手

林桂

入選した応募の中から、林が推薦した作者、作品の評を以下に。（順不同）

さいう（大学生）

いやほん／を／外せば耳朶は冷えていて／きおくの果てへ降る夕まぐれ

月光／は／白磁のにおい／身ひとつで彼岸の銀河鉄道めざす

終電にきみ／を／見送り帰る日の／ひょうりゅうびんのような星空

羽を捥ぐ／骨／のうごきを見つめれば／此世の森に揺れる野葡萄

天をやぶる／雲雀の群れの／それぞれに／とうしんだいの臓器を抱いて

斎場／へ／影を蹴りつけ向かうとき／ちきゅうはひ

かりまみれの樹海
うえはーす齧れば春の火の匂い

【評】短歌体を中心に、時々俳句体を書く。5行以内という募集の表記規定の中で、最も工夫された表記を採用している。前年度に比較しても、表現は洗練されてきている。最終行で新たな世界を開く。パターン化していると言えば言えるが、一編ずつ違った世界を見せる力が備わっている。

川上真央（大学生）

こわされた一人称で／歩くとき／あなたに解けたままの靴紐
ルイボスティー香れるままの／くちびるで／少女の囁くようなフルート
ぺんぎんが夏天に晒している十字

緑陰にわたしあるいは火の余裔
夏霧にさらし／泣きあと糖衣めく
星空のように瞳は／傷ついて／テディベアまだ／抱かれるかたち
うたうとはうったえること／丹田に／ふるえつづける水鏡がある
鼻濁音うすく伸びゆくような朝／たまごは水の声でやぶれる
初夏の陽はすこししめって／さよならのあった／別れのほうが少ない
横顔のきれいな人／を想うとき／胸をさまよう土星のひかり
めぐすりの光まぶしく／すこしだけ／溺れてみたい春風がある

野苺のかたちの／えくぼ持っていて／きみは／どこでも生き抜けそうだ

【評】短歌体を中心に俳句体も書く。甘やかな青春の作品群である。しかし、表現が甘いかといえば、それを伝える表現力は備わっている。若書きと言えば若書きだが、若書きを持つことは一生の財産ともなる。与謝野晶子が後年、自らの『みだれ髪』を改作したことは知られているが、自ら恥じた若書きを、後年獲得した表現力でも超えることはできなかった。今も若書きが流通している。後で恥ずかしくなるくらいのものを、書けるときに書いておかなければならない。

ムクロジ（大学生）

空っ風信号全部青になれ

しゃっくりがおさまったので／帰ります

秋の蝉靴箱に靴深く入れ
鶏頭花そしてベッドの父を抱く
梅雨明けて手前の卵から使う
短夜の本におさまる栞紐
花陰にカレーは飯をまわりこむ
皮の下が腐る桜に触れている
にわとりのあしのつちいろ鼓草
三月の醤油をはじく目玉焼

【評】俳句体を中心に書く。既存の俳句の文体や世界で書ける能力は、この若い作者が最も優れているとも思える。一方、様々な試行もあり、表現世界を広げようともしている。これが成功するかどうかは今後次第であろう。自分の優れている点を殺さないで世界を広げていけるかどうか。注視してゆきたい作者だ。

雲理そら（大学生）

プリンパフェの完璧な造形を見よ／ここから先に無意識がある

在中のはんこを押してゆく夜の／事務室に押し寄せる黒うさぎ

理科準備室で準備されること以外／をずっと頑張っている

何者も傷つけながら背を伸ばし／大きな栗の木の下を出る

とおい海の写真を／レコメンドされる日に／ふたりっきりでなびかせる布

故障ならみんな許してくれるのに／躑躅をいっぱい摘む人件費

さわれない花から順に水をやる

【評】短歌体を中心に時に俳句体を書く。自己愛なのだろうが、見つめる目はどこか冷たく覚めている。言葉には抒情性が稀薄で、孤独で冷たく響く。自身の内面が深掘りされているからだろう。

互井宇宙論（大学生）

アンドロイド漱石ひとりでに滝へ
雲丹飲んでしずかに紺となる夜空
権力うつくしいうつつ齧る柿っ！
夜を司書は古い奇書について語り／頷きながら椿は泥へ
ほらはやく月の剥製つくらなきゃ
雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される
水色のゆめに沈めるゆすらうめ
からくりに似てからみあう霞草

花曇だあれもいない長廊下

【評】川柳作家なのだろう。しかし、俳句読みが読んで、優れた俳句としか読めないものも含まれている。批評性を全く感じない訳ではないが、奇想やナンセンスの文脈の方が強く感じられる。異色の存在感がある作家だ。

快名（大学院生）

鉄橋を通過する時よく響く心よ
冷えた軌条に継ぎ目
賃貸の更新に名を書き淀む／楓がひどくゆっくり降りた
祖父の訛りに訛る／ああ、／ナナカマドが／淡い葉裏を見せてそよいだ
行くあてのない自転車の／そのままを海へ漕ぎ／どうして月がある

雪解けの川のひとつが／（借りていた本、返そうか）／合流をする

鳴り出せば減速し出すオルゴール　あの冬きみは帰省をやめた

つまずいて／ふと出した手は空を切り／広がる手押し相撲の花野

【評】時に短歌のリズムを感じさせるが、短詩体がメインの作者であろう。全体のリズムはゆったりとしていて、作品の中に読者を誘う。最後の行に詩的な仕掛けがあるが、読者を驚かせようというようなものでなく、共感と安心感を生むものとなっている。

大西美優（大学院生）

フェミニストです、そして／黙るほどの／雪

シュプレヒコール／水楢は記憶のかたち

蓑にくるまれて金箔色のゆめ
みらべるのじゃむ／ゆらゆらと煮る／夜長
夏藤を離陸のときに思いだす
ぱいなっぷる抱いて／地下鉄／すこし泣く
どうすることもできない／白アスパラ茹でる
朧夜の／マフィンぽそぽそしてさみしい

【評】表現形式としては多彩な作者である。俳句が主体かもしれない。しかも、自由律の文体を感じさせる作品もある。内面を掘り下げる書き方というよりは、その情況を描くことで推察させるという方法が似ているからかもしれない。

彩燈琴璃（大学生）

真昼間に茹で大根が透けていく／また占いは少し当たって

金色は内光りして澄む夕座
ねりあめがまだ透明で、透明で／毎日透明で、透明で

【評】短歌体と俳句体を書く。どちらもオーソドックスな文体と言えるが、感性の良さが光る。「透けていく」「内光りして」また「透明で」のリフレイン。

金光舞（大学生）

曙の繰り返されて花の雨
さよならの度に生き方を忘れる／明日は鳥になれますように
海の匂いにかまきりが／　ひ／る／　がえる
生まれてきたのは私のせい／だから三春駒の／鬣に
展く花になりたい
どうすれば／上手く生きられるのだろう／柔らかい
桃を冷凍してみる

心臓はみんな緋色で山躑躅
カクレクマノミが桜になってゆく

【評】俳句体から出発して、短歌体、短詩体へ表現を広げている。基本的に素直な表現が主体であり、それが魅力の作者である。生きがたさを言葉に変えている。

上原一樹（大学生）

初夏の潮の匂いの町役場
村雨に口数多く秋なすび
花カンナ晴れているから黙りたい
ところてん吸って未来が少しくる
電柱が九月の雨に濡れている
草の花荷物少なく引越して
遠くから声で呼ばれて岸の夏
溜息のように磯巾着あるく

ケチャップを押し出す力沈丁花
閉店の日の白菊を買ってゆく

【評】俳句表現の骨法をしっかり身につけている。作品数は少ないが、表現が安定している。「花カンナ」「草の花」「沈丁花」など、取り合わせは俳句的にも巧みである。

マズルカ（大学院生）

新しい神話が呪いとなるように／子育て雑誌のまぶしい聖句
この辺にポチを埋めたの／あの秋に／いま銀桂の花を降らせて
蛍光が切れてひとつの輪となった／灯を捨てに行く日の驟雨
育児書もそよ風孕む時が来て／夕方五時の秋の古書店

未熟児の体内時計も午後を指す／いじめを許したあとの給食

「俺のため／あるんじゃないんだ天国は」／犬より安いシャンプーを買う

死ぬときは何時も一人だ／アンパンマン／だからごはんはふたりでたべる

【評】短歌体の作者。生活に密着した感性を生かした作品が多い。生きづらさを克服するために書いているように見える。

森川紬（大学生）

ぷーるさいどに人魚の手形／君の住む島で雪は降ったかい

干からびた蝉退けて／夏の部品のような／ラムネ瓶を運ぶ

深海によばれるように／スロープをゆっくり降りる
車椅子

メロディにならない口笛が／ひとりぼっちの蓮になる
ほっとみるく／あったかいのは／おとうとが／ミトンをはめて運ぶから

【評】短歌体の作者。日常に潜む違和感を書き留めているようだ。「人魚の手形」「夏の部品」「深海」「蓮」が、日常の意識に突然出現するのだ。

林が推したが、惜しくも入選を逃した作品、作者。林には入選と何ら遜色はない。

回る卵（大学院生）

鏡面を保ちつつ湧く水の様に／怒らないけど許さないから
あきさめは／ぎんいろにうたい／はなびらは／ぎん

いろにふるえ
水槽の中の土曜日秋曇り
どうして九月は／宇宙と同じ密度なんだろう
朝日射す透明骨格標本の秋
代償も正義もいらない水鉄砲
花束の抱きしめ方が分からない
億年を蔵う待ち針春の星

【評】俳句体を中心に、短歌体も書く作者。あるいは作者の意識では川柳もあるか。「水鉄砲」「花束」は川柳としても成立しそうだ。

松浦もや（大学生）
墓石を磨くブラシは／花のごとひらいて／朝の中に／佇む
はつなつの／空腹のあるきびしさに／折畳み日傘や

わらかく／反る

大欠伸／から帰り来て／会いたい、のことをあなたは／五月雨とよぶ

スプーンの窪みに／舌を沿わせれば／いつか／かなしくなるためのひと

【評】短歌体の作者。圧倒的に作品数が少なかったのが残念。一編一編の完成度は高く今後に期待したい。

林が推薦しなかったが、入選した人の作品と作者。

高田皓輔（大学生）

冬晴れにもたれて歩くこのごろの／川はさめざめ出ていくばかり

梨に似た友達を一人知っている

【評】短歌体、俳句体、川柳と表現は多彩。前回は推薦した作者でもある。今回は、やや理に傾いた感じがあり、

巧みさは感じつつ、私には前回より印象に残る作品が少なかったように思う。15篇の選という制約の中で、今回は外させて頂いた。

青木菓子（大学生）

ドーナツは欠けて開始の銃が鳴る
以上でも以下でもなくて青葉闇
賞賛の後ふみつぶす蟻地獄
ごぼう切るときだけ思いだす童話

【評】川柳の作者なのだと纏めて読んで理解した。俳句読みの癖は、俳句として読んでいたので厳しい判断になった。

今回は大学生、大学院生のみの入選となった。注目していて、応募がなくて残念な若い才能がいた。最後に紹介する。

夏蜜柑（16歳）

堤防を歩く風光っていても
独特な感性持ち合わせないので／前世はたぶん椋鳥らへん

姿勢だけ整えておく秋時雨
八月のリュック抱えてみんな寝る
夏草に埋まるバス停日の暮れて
蟻塚を壊しもうすぐ百日目
プライドが邪魔で仕方がなくて鯵
ビー玉の皆均等で夏痩せる

【評】注目していた才能であった。応募があれば、高校生だっただろう。道化を演じられるところに才能と余裕を感じさせる。

仮野（17歳）

さみしいと／さびしいの湿度の違い

型抜きが／されたクッキー生地のように／地球に映るいきものの影

茅野文（15歳）

私／ケーキのいちごが嫌いなんで／ここで／帰ります

「概念」の／木偏でつまずく／わたしです。

呼吸とか、しましょう。／自由なつもりでね／僕が一番自由だけどねっ！

ももか（17歳）

冬麗にメリーゴーランドの鏡

春の閤港町行くバスの揺れ

桜の中／ランドセルは／入学の子の有り余ったちからで／めいいっぱいふりふりする

葉ざくら（15歳）

あうとれつとだからか／雨がすごく寒い

もし人が花虻と暮らせてゐたら

龍 秀美

口語詩句にはさまざまな詩形がありますが、私は基本的にはポエジーはひとつと思っています。口語詩句があたらしい詩形としてデビューするには、広く受け入れられる場としての魅力が必要でしょう。

奨学生に選ばれた方々には折々に、初々しい「未知の広さ」が見受けられます。定型にこだわることなく新しい感性を受け入れやすいことが口語詩句のひとつの長所でもあるのでしょう。

口語詩句にはアフォリズムという分野も含まれます。大谷翔平選手の名言「憧れてしまったら、越えられない」は、日本社会が持つ言葉への関心を表したトピックでした。文学として、社会批評として、何物にもさえぎられず表現できる場として、これからもさまざまな可能性が潜んでいると思われます。

今年は応募作品が増えると共に新鮮な顔ぶれが多く見受けられました。中高生の方々にも広く期待します。以下、印象に残った作品を挙げてみます。

葉ざくら

ぜんぶここに容れて／　　ぜんぶが淑気になる

ロンドン橋落ちた落ちた落ちた／落ちたところに蘖ゆる

言葉の選び方に特色がある作者。この感覚を伸ばしていくと将来が楽しみ。

川上真央

クッキーの角までふくれ花明かり

黒鍵を押しこむような／はげしさを／灯し／あなたは無言を選ぶ

鼻濁音うすく伸びゆくような朝／たまごは水の声でやぶれる

この人は、ふくらむ、押し込む、やぶれるというような現象を表す動詞に興味があるらしい。しかも、する側と、される側と両方に力が働いており、相互の関係がよく表れている。

松下誠一

見るからに心因性のカタツムリ
犯罪をしようとしたらこれだもん
薔薇の咲く体になったころですか

対象と自分との距離の取り方が絶妙で、非常に楽しい。

ムクロジ

花陰にカレーは飯をまわりこむ
花冷の糸に重たいティーバッグ

ふの口でため息をつくとき時雨
亡き人の／ＬＩＮＥアカウントの残る／こーん
こーんと叩く地球儀

自然発生的な感情に動かされるとき、一方では身体は感情とは裏腹に無意識に動いている。矛盾した、または複合的な人間という存在。そのことに気付くとき、新しい発見もある。

互井宇宙論
木の瘤に木の呵責ある銀河系
どうやって伝記にならず／生き延びよう
雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される
木耳を食べるフルート奏者たち

ひとつひとつに、作者の深いところから出る物語がある。

金光舞

ぺんぺん草と呼ぶモザイク／で手首の動脈を隠し／て／　い／る

母がいたらしい焼鳥刺してゆく

カクレクマノミが桜になってゆく

水馬の匂い捕らえる初老の父

　輪郭のくっきりとした、しかし優しい世界。

マズルカ

新しい神話が呪いとなるように／子育て雑誌のまぶしい聖句

泳がせた不倫が紅い鰭を持つ／ちにてんてんのいぢめのように

死ぬときは何時も一人だ／アンパンマン／だからごはんはふたりでたべる

「子育て雑誌」「いぢめ」「アンパンマン」などのキーワー

ドが、いつもと違う表情を見せてくれる。

さいう

いやほん／を／外せば耳朶は冷えていて／きおくの
果てへ降る夕まぐれ
羽を捥ぐ／骨／のうごきを見つめれば／此世の森に
揺れる野葡萄
ろっこつのかたち／に／鳥をまもるとき／けやきの
喉はよくしなる　弓

幾つもの印象的な言葉を連ねて、それをすべて活かす力は類を見ない。季語のダブりさえ口語詩句の特権のようだ。年々広がる作品世界が力強い。

彩燈琴璃

かわせみが好きよ、／つるぎを胸に当て／鋭く水に
刺す日があれば

真昼間に茹で大根が透けていく／また占いは少し当たって
ルノワールの描いた桃が、／少しだけ林檎みたいだ、／心臓を喰む

期待と不安が交差する世界を描く。その狭間に生まれる謎が心地よい。

快名
絶滅がこの先ずっとあるだろう／それでも辞書に語彙、隣り合う
越境を終えた翼のようにして／青い器におくカトラリー
耳をすませてきこえるでしょう／／さあ、風路　そこには、風路／／きこえるでしょう

自然の無機質な非情さと人間の精神の営みとの差異を

描き出す。

大西美優

かぶら汁ふむふむあれが倫理観
居待月／家具のなかでは椅子がすき
はつなつの性別欄に枠いくつ
木の芽どき／祖母のメイルのぎこちなく

倫理観やジェンダーなど、時代によって変化する思想と取り合わせた、季語の新しい使い方が面白い。

口語詩句投稿サイト 72h

口語詩句年鑑2025

ことばの力詩集別冊

https://sasakitaijuikueikai.or.jp/

発行日　2026 年 10 月 1 日
発行　公益財団法人佐々木泰樹育英会
東京都中央区明石町 8-1　聖路加タワー 40 階
TEL.03-6278-5595　FAX.03-6278-5591

「ことばの力詩集」の命名は、榎本了壱氏によるものです
編集・デザイン＝アタマトテ・インターナショナル
AD＝榎本了壱　D＝坂口真理子
印刷・製本＝株式会社グラフィック
ISBN 978-4-910485-77-5

佐々木泰樹育英会の口語詩句事業

【第8回口語詩句賞】

賞の種類と賞金

大賞（原則1名）100万円　奨励賞（若干名）10万円

スケジュール

投　稿　期　間：2026年2月1日～2027年1月31日
選　考　期　間：2027年2月1日～3月5日
選考結果開示日：2027年3月18日
授　　賞　　式：2027年3月29日

【2027年度 口語詩句奨学金概要】

区分と給付額

中学生6万円　高校生12万円　大学生（大学院生含む）60万円

スケジュール

投　稿　期　間：2026年2月1日～2027年1月31日
選　考　期　間：2027年2月1日～3月5日
採用書類提出締切日：2027年3月12日
選考結果開示日：2027年3月19日
奨学金給付通知書授与式：2027年3月29日

※最新情報は本財団ホームページでご確認ください
https://sasakitaijuikueikai.or.jp/

後援

一般社団法人現代俳句協会
株式会社思潮社 現代詩手帖編集部

9784910485775

1920192000390

発行　公益財団法人佐々木泰樹育英会